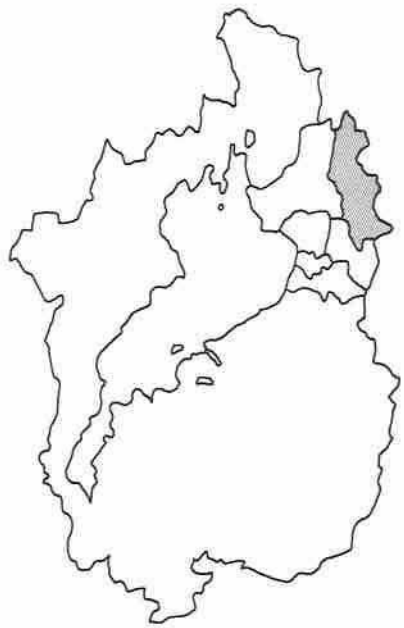
伊吹町文化財調査報告書第６集

起し又遺跡発掘調査報告書

—姉川上流縄文早期・中期～後期遺跡の調査—



1993. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

序

21世紀に向けて伊吹新時代を築くための特性（ポイント）のひとつに、「近畿・中部・北陸圏の広域交流を支える接点の町」があります。

今後、従来の枠組みを越えたさまざまな交流活動が一段と活発化するなかで、本町の広域的な役割や新たな発展の可能性が高まることが期待されています。この広域交流がはじまったのは、はるか数千年の昔、縄文時代がはじまってすぐであったことが近年の調査から明らかになってきています。今日、国道365号線・21号線や名神高速、東海道本線や新幹線が通過して東西の文化を結んでいるように、関ケ原低地帯といわれる狭い平野部や伊吹山中の尾根道を縦横に結んで、各時代の文化の広域交流が行われていたのです。

今回、はからずも町域北部の曲谷地先で発掘調査を実施することになりました。南部の伊吹山麓では数度の発掘調査をはじめ、諸先学の地道な埋蔵文化財調査が行われていましたが、曲谷を含む東草野地区では初めての本格的な調査で、その成果が期待されました。その結果、町内最古の土器片をはじめ、伊吹山麓の遺跡群に先行する縄文遺跡の存在が明らかになりました。

本書は、その成果を広く周知するために作成いたしました。今後の学術研究あるいは歴史教育の場に微力でも寄与することがあれば、幸いであると考えます。

東草野地域では、今後も各種開発事業が予定されています。このような開発と文化財保護とのトラブルを未然に防ぎ、地中に眠る埋蔵文化財をはじめ古来より受け継がれた文化遺産を積極的に保護し、活用して伊吹新時代構築のために活かしていきたいと考えております。今後とも関係各位のご理解、ご協力をお願いいたします。

最後になりましたが、調査の実施にあたりご協力いただきました関係機関・各位に厚くお礼申し上げます。

１９９３年３月

伊吹町教育委員会

教育長　　石　河　竹二郎

例　　言

1．本書は、滋賀県坂田郡伊吹町内での姉川治水ダム建設事業に伴う県道山東本巣線付替工事に関連する埋蔵文化財（起し又遺跡）の発掘調査の報告書である。

2．本調査は、平成４年５月から平成５年３月にかけて実施した。

3．調査は滋賀県の依頼により、伊吹町教育委員会が実施した。調査体制は下記の通りである。

調査主体	伊吹町教育委員会	教育長	石河竹二郎
調査事務局	伊吹町教育委員会　社会教育課	課　長	堀内安夫
		課長補佐	篠原　渡
		主　任	藤敦幸子
		主　事	的場文男
調査担当者		技　師	髙橋順之
調査作業員	世一知徳　表地武一　世一藤助　世一志づ子　表地ふみゑ		
	姉川栄司　佐野正和　瀧澤康仁　宮井　宏　宮川満子		
	森　和幸		

4．出土遺物の整理、復元、実測に関しては上記作業員のうち姉川・佐野・瀧澤・宮井・宮川・森でおこなった。

5．本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言等種々の協力を得た。記して厚く感謝の意を表す次第である。

兼康保明（滋賀県教育委員会）・桂田峰男（山東町教育委員会）・木下哲夫（金津町教育委員会）・葛野泰樹（滋賀県教育委員会）・坂本正裕（長浜市教育委員会）千葉　豊（京都大学）・土井一行（米原町教育委員会）・富井　眞（京都大学大学院生）・富山直人（神戸市教育委員会）・中井　均（米原町教育委員会）・中村健二（滋賀県教育委員会）・福永円澄（伊吹町史編さん室長）・松川雅弘（福井県教育庁）・丸山雄二（長浜市教育委員会）・宮崎幹也（近江町教育委員会）

〔五十音順・敬称略〕

6．遺物の写真撮影については、寿福　滋氏にお願いした。

7．遺物の番号は本文中・挿図・図版ともに対応する。

8．本書の執筆・編集は髙橋順之がおこなった。

本 文 目 次

第１章　調査にいたる経過 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境 …… 2

第３章　調 査 の 経 過 …… 6

第４章　調 査 の 結 果 …… 8

第５章　出　土　遺　物 …… 11

第６章　ま　　と　　め …… 23

付　論　伊吹山地周辺の縄文遺跡 …… 29

挿 図 目 次

第１図　遺跡周辺位置図 …… 1

第２図　伊吹町地質図 …… 3

第３図　表採土器実測図 …… 4

第４図　起し又遺跡周辺地形図 …… 5

第５図　トレンチ配置図 …… 6

第６図　試掘トレンチ柱状図 …… 7

第７図　調査区位置図 …… 9

第８図　調査区平面図 …… 9

第９図　検出遺構平面図 …… 10

第10図　土層断面図 …… 10

第11図　出土遺物 …… 17

第12図　出土遺物 …… 18

第13図　出土遺物 …… 19

第14図　出土遺物 …… 20
第15図　出土遺物 …… 21
第16図　出土遺物 …… 22
第17図　各遺跡位置図 …… 24
第18図　伊吹山地周辺の縄文遺跡 …… 36

写　真　目　次

写真１　白山神社板碑（伊吹町指定文化財）

図　版　目　次

図版１　調査地周辺航空写真
図版２　調査前状況・作業風景
図版３　調査区全景・説明会風景
図版４　遺構検出状況
図版５　遺物出土状況
図版６　出土遺物（早期押型文土器）
　　（縄文式土器）
図版７　出土遺物（縄文式土器）
　　（同上裏面）
図版８　出土遺物（縄文式土器）
図版９　出土遺物（縄文式土器）
　　（縄文式土器底部）
図版10　出土遺物（石器）

写真１　白山神社境内　板碑

(烏越峠)
(新穂峠)
久瀬村
坂内村
(品又峠)
春日村
○起し又遺跡
(国見峠)
(七曲峠)
●船跡遺跡
●伊吹遺跡
●井の田遺跡
●杉沢遺跡
●番の面遺跡

第１図　遺跡周辺位置図

第１章　調査にいたる経過

滋賀県坂田郡伊吹町曲谷（まがたに）には、周知の遺跡として起し又遺跡が所在している。今回調査を行うことになった起し又遺跡は、曲谷集落の北東部にある谷間に位置している。同遺跡は、平成３年度に行った町内遺跡詳細分布調査で新たに確認したもので、縄文時代後期の縁帯文土器片などを水田において表面採集した。しかし、その性格については不明であると言わざるをえない。

今般、姉川治水ダム建設事業に伴う県道山東本巣線付替工事が計画され、起し又遺跡で事前に発掘調査の必要性が生じた。

調査は、滋賀県の依頼により、伊吹町教育委員会が実施し、現地における発掘調査は、平成４年７月20日より８月１日までおこなった。

第２章　遺跡の位置と環境

（位　　置）

伊吹町は滋賀県の北東部に位置し、町域の多くを伊吹山地が占める。伊吹山地は、県下最高峰の伊吹山（1,377ｍ）を南端にして、標高1,000～1,200ｍの稜線や峰が、北方の越美山地へと連なる。この尾根は滋賀県側の姉川水系と岐阜県側の揖斐川水系との分水界をなし、県境となっている。

町域は、東西７㎞、南北22.7㎞、面積109.17㎢で、帯状に南北に長い。南を坂田郡山東町、西を東浅井郡浅井町、南東から東にかけては岐阜県不破郡関ケ原町と揖斐郡春日村、北は揖斐郡坂内村に接する。

地形的には山岳部が多い。町の北中部は姉川のつくる河谷部からなり、南部は伊吹山から流れ出る弥高川・政所川・藤古川等が形成する複合扇状地となっている。

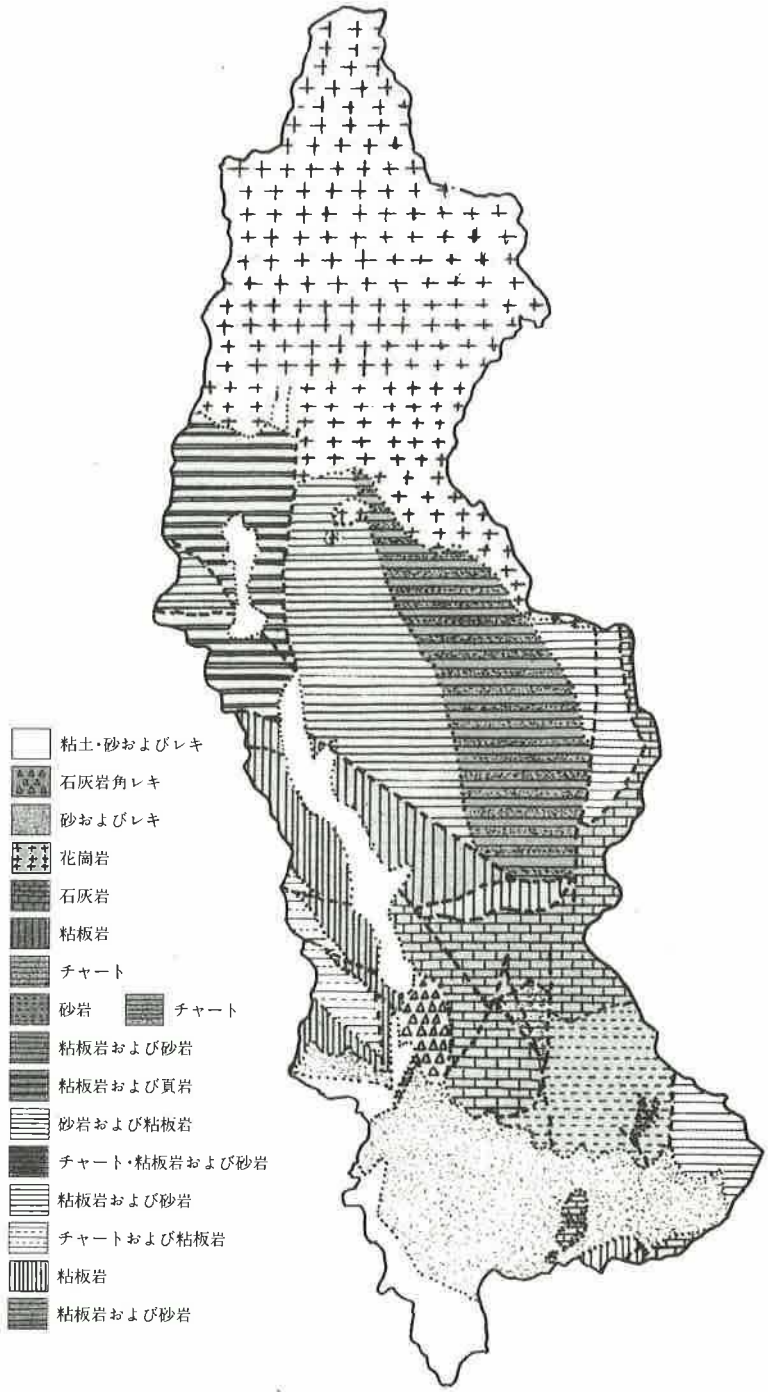
起し又遺跡の所在する曲谷集落は、町の北部、南流する姉川左岸の谷底平野に立地している。東は伊吹山地で、西は七尾山系の天吉寺山を境に浅井町野瀬・高山に接する。この高山集落から下流の草野川沿いの谷を「（上、西）草野谷」というのに対して、曲谷集落のある姉川上流の谷を「東草野谷」と呼ぶ。遺跡は、集落から県道をさらに北へ約450ｍ行き、そこから東へ分岐する林道を約750ｍほど谷合へ入ったところに所在している。この谷は、姉川の支流で伊吹山地に発する起し又川のつくりだしたもので、起し又川が北

東から西へ流れを変えるあたりは山が開け、段丘状に水田が広がっており、この台地上に遺跡が広がっているものと考えられる。小字名は「起し又」である。

（自然環境）

曲谷付近は、姉川層とよばれる粘板岩や頁岩でできている地層のため、上流の花崗岩地帯とは異なり、川は深いＶ字谷を刻んで流れている。しかし、曲谷より北の甲津原周辺は、花崗岩帯となっている。後にも述べるが、中世以降、この花崗岩を原材料として、石臼等の生産が曲谷集落で行われている。

伊吹町内の気候は、伊吹山南西山麓地区を除くほとんどが、日本海側気候区北陸型に属すといわれている。その特徴としては、気温が低く降水量が多いうえ、特に冬期の積雪が多いことがあげられる。起し又遺跡は標高420m付近に立地しており、豪雪地帯ということができる。①



第２図　伊吹町地質図（『伊吹町史』より）

（歴史的環境）

伊吹山麓は県下でも有数の縄文遺跡密集地といわれる。町内においては、伊吹山西南麓の扇状地上に、中期後半から終末を中心とした大清水の井の田遺跡や晩期を中心とする杉沢遺跡をはじめ、高番、村木、上平寺、弥高、上野などに遺跡が所在する。姉川の峡谷部の入り口には、中期の伊吹遺跡がある。さらに、山腹の太平寺からは石斧が、伊吹山頂からは石鏃が出土している。② また周辺を見ると、浅井町には伊吹山と姉川をはさんで西に向かいあう七尾山（691m）の麓に著名な醍醐遺跡（中期）があるし、同じく中期の山東町番の面遺跡が、天野川をはさんで伊吹山の南に位置する霊仙山麓の丘陵上に所在する。

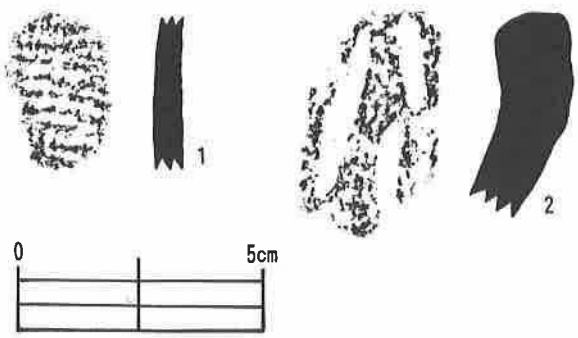
このように、伊吹山西南麓は古くから開けた地域であったということが、縄文遺跡の分布からもうかがえる。しかし同地域の中で、曲谷が所属する東草野谷地域のみは、確かな出土遺物が知られていない。そのため、過去の調査報告の中では、「東草野谷地域を除いてはかなり古くから開けていたらしく」とか、「姉川上流（東草野谷を指す）には特別に主流となるべき文化はなく、後述の伊吹文化圏の残影が散見するにとどまった」などの見解が示されたこともあった。③

しかし、過去に起し又や曲谷集落の南の小字安場から縄文土器が出土したという話が地元に伝わっていたことから、平成３年度に町内遺跡詳細分布調査事業に伴う周辺地域の踏査をおこなった。結果、今回の調査地の南東側上手の水田から縄文時代中期あるいは後期と思われる土器片を10点ほど採集した。１は全面に縄文が施された土器片である。２は口縁部で、縄文の地文の上に太い沈線を施している。縄文時代後期の縁帯文土器で、北白川上層式であろう。④ これにより、姉川上流においても縄文遺跡の存在が確かなものとなった

さらに、この分布調査では、今まで埋蔵文化財包蔵地が遺跡地図上皆無であった東草野地域において、主に姉川沿いの段丘上で須恵器や土師器が採集され、遺跡が分布していることがわかった。

中世には、本町は中南部の伊吹庄と、南部の一部地域が属した柏原庄（現山東町域）、そして東草野地域が属したと考えられる草野庄に分かれていたようである。

草野庄は、現在の浅井町域の草野川沿いの草野谷とその下流、伊吹町域にあたる姉川上流部の東草



第３図　表採土器実測図

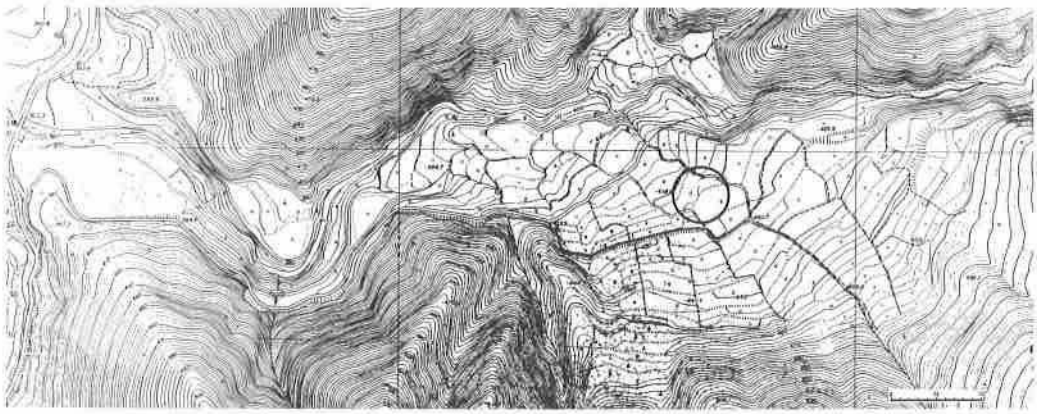
野谷で形成されていた。平治の乱に際して浅井町野瀬の大吉寺に源義朝をかくまった草野定康に義朝がその所領を安堵したことが「吾妻鏡」文治三年（1187）二月九日条にみえる。室町時代には、円満院、青蓮院門跡、大館氏（将軍近臣）によって分割領知されていた。また、京極氏が北近江を制すると、下坂氏や上坂氏が当庄の代官職を勤めている。

江戸時代、東草野地域は北から甲津原村、曲谷村、甲賀村、吉槻村、上板並村、下板並村の六村があった。寛永石高帳には小堀遠州領（幕府領か）、元禄郷帳では小室藩領（小堀氏・浅井町小室)、天明八年に小室藩改易により幕府領となっている。⑤

東西の草野谷は山地によって隔てられているが、吉槻と浅井町鍛冶屋をつなぐ七曲峠で結ばれ、一つの生活圏を形成していた。また岐阜県側へは、曲谷の北、甲津原から坂内村諸家へ越える新穂峠、板並から春日村美束へ越える国見峠などの主要交通路があった。起し又からも春日村長者平へ越える峠道がかつてあったという。

最後に、曲谷の歴史の中で特筆すべき、石造物加工と加工集団について簡単にふれておきたい。享保十九年（1734）完成の『近江輿地志略』曲谷村の項には「石工多く仕す」とある。曲谷の東北方の山手に花崗岩床がある。この花崗岩は黒雲母を多く含み、粒子が粗く、石質が粘くて角が立てにくいもので、ひき臼に適していた。往時はここから石材を切り出し、山で粗どりしたものを、持ち帰って冬仕事に仕上げたという。曲谷での石材加工の始まりについては、「西仏房」という12世紀頃の人物が、加工技術を伝えたという伝承があるが明確ではない。

現在集落内の白山神社に、花崗岩製の２基の板碑（町指定文化財・写真１）がある。１基は鎌倉時代末期の1310年頃の造立と推定される弥陀三尊形式のもので、高さ約153.5cm。左塔も1330年頃のものと推定されている。集落内には、他にも鎌倉後期から南北町のものと見られる宝篋印塔台座等があり、石臼加工以前にこれらの製作を手がけていたものと考えられている。また、起し又川の上流等で石切場跡が確認されている。曲谷は生産遺跡としても貴重である。⑥



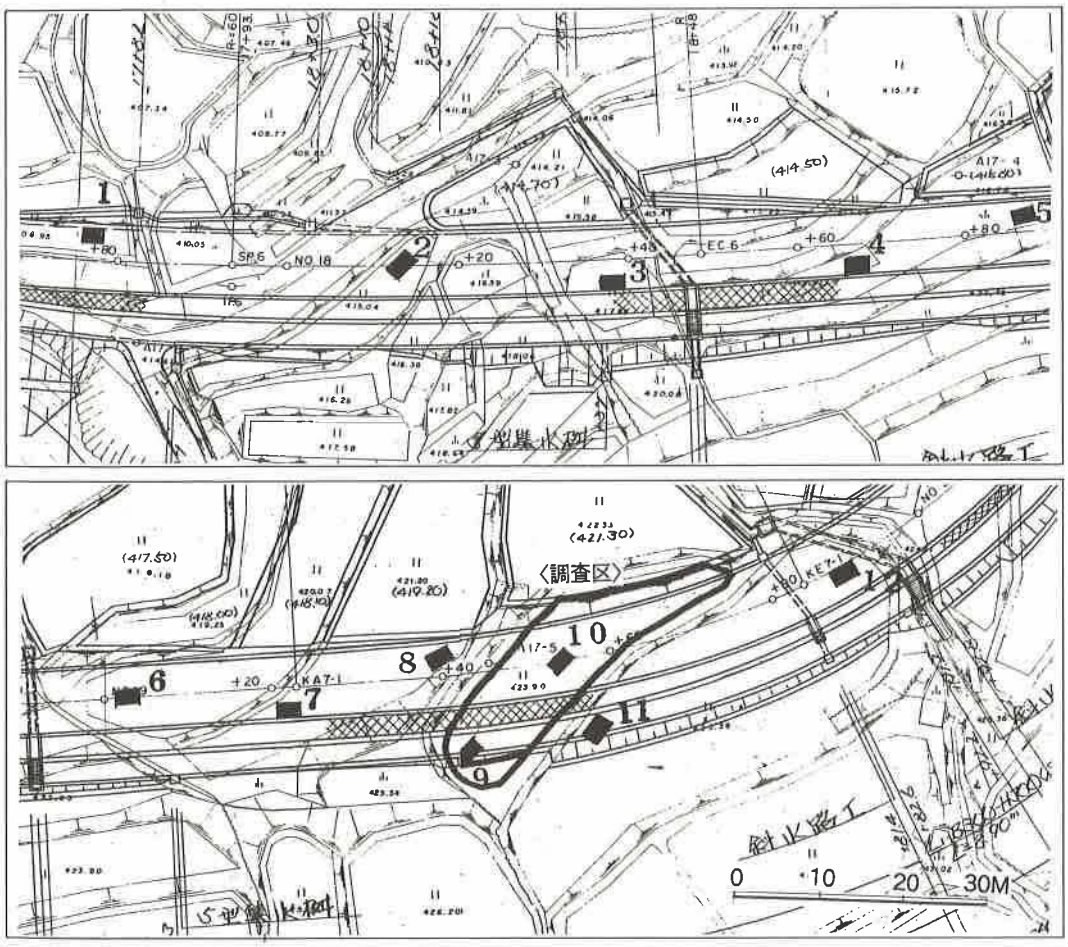
第４図　起し又遺跡周辺地形図

第3章 調査の経過

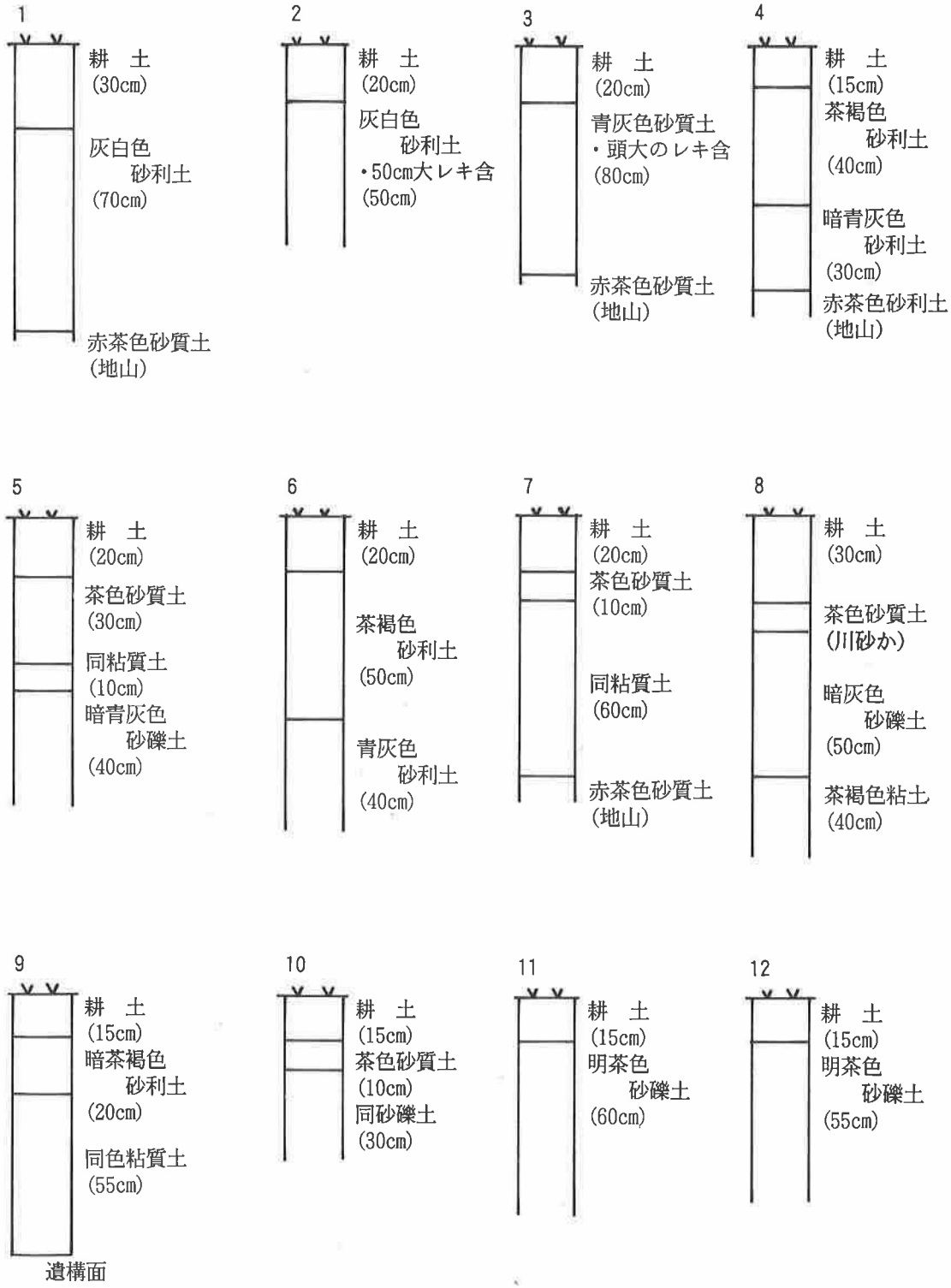
調査は、県道山東本巣線付替工区内において、起し又遺跡の周知の範囲を中心として試掘調査を実施した。調査は、約３ｍ×５ｍの試掘トレンチをほぼ20m間隔で、12ケ所設定して、遺構と遺物の有無について精査した。

試掘調査の結果、トレンチ９において縄文時代の遺物と遺構の一部を検出した。これらを確認したのは、表土下約90cmにあたる。これらの結果に基づいて協議を行い、工事によって影響を及ぼす個所を発掘調査し、資料の記録保存化を図った。

調査区は、標高約424m付近に位置しており、段丘状の地形の中間付近に当たり、山からの傾斜がゆるやかになったところである。現地調査の方法は、0.4m³級バックホーを用いた表土掘削のあと、人力による遺構検出、遺構内掘削を行い、遺物の検出をした後に写真撮影、平面図の作成等を行った。



第５図　トレンチ配置図



第６図　試掘トレンチ柱状図

第4章　調査の結果

調査の結果、明瞭な生活の痕跡を示す遺構は検出されなかった。しかし、土層および出土した土器から、縄文時代後期か、あるいはそれ以前と考えられる遺構面の一部を確認することができた。今後の調査で、この面を追いかけることによって、生活の痕跡を確認できるものと考えられる。

出土した遺物のほとんどは、この遺構面の上に堆積していた黒色の腐植土層の中に含まれていた。検出された遺物は、縄文時代早期、中期、後期の土器片と僅かな石器であった。

その他の時期に含まれる遺物は全くなかった。

（層序）

土層の堆積は、約20～40cmの耕土を剥ぐと、山手（南）の方では茶褐色の粘質土層が薄く堆積しており、遺構面を形成する黄茶色砂質土が現れる。下手（北）では、茶褐色の粘質土層が約80cm近く堆積し、遺物包含層である黒色の腐植土層が約20cm堆積している。この層には、帯状に漆黒の部分が所々でみとめられ、鉄あるいはマンガン系の成分が混じっているものと考えられる。これをめくると黄茶色砂質土が現れ遺構面となる。

基本的には、耕土・茶褐色粘質土・黒色土・黄茶色砂質土が傾斜して堆積しており、山手にいくに従って、茶褐色粘質土がなくなり、黒色土の包含層が耕土下に堆積しているものと考えられる。実際、調査区の南東側山手にある水田では、容易に土器片を地表面採集することができ、このことを裏付けている。

（遺構）

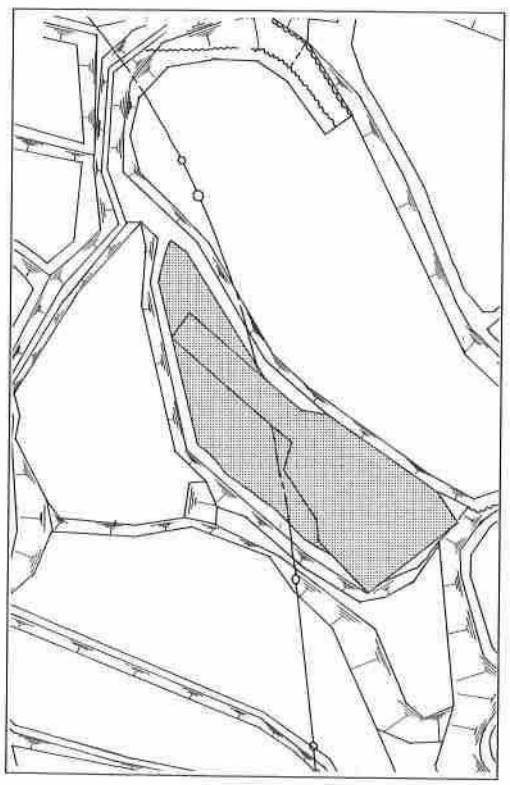
検出した遺構面は、調査区長軸の三分の一程度で、南西端に広がっている。残り三分の二は、おそらく山からの崩土層で、耕土をはぐとすぐ礫層が現れる。遺構面は東西約10m、南北約10mの傾斜面で、遺跡全体のごく一部と思われ、崩土層が遺構面を切っていることから遺跡がさらに北東へ広がっていたかどうかは確認することはできない。北および北西方向（下手）については、試掘調査の結果、黄茶色砂質土の遺構面は検出されなかった。これらのことを考えると、今回調査で検出した遺構面は、南東および南西の山側に広がっているものと考えられる。

検出した遺構は、11個のピットと落ちこみ状の遺構のみであった。Ｐ１～Ｐ６は約30～40cmの円形あるいは隅丸方形をしたもので、深さが約20～30cmを計る（P2のみ約60cm）。

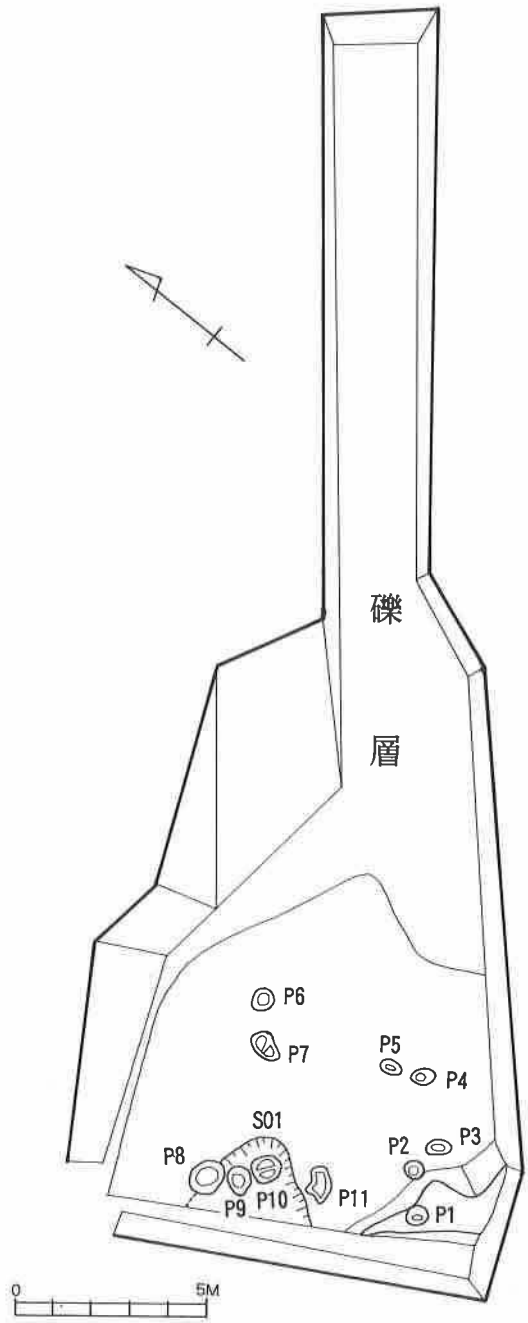
Ｐ７～Ｐ11は、約50～90cmの楕円形あるいは不整形で、深さが約20～70cmのものである。しかしこれらは、規則性をもって並ぶものはなく、その性格は判らない。

ピットに伴う遺物は、Ｐ３・Ｐ７で検出した時期不明の土器細片と、Ｐ４で検出した石器を作ったときに出たと思われるチャートの剥片１点のみで、遺構の構築時期の決め手となるものはなかった。また、Ｐ１とＰ９には、頭大の花崗岩が腐植（クサレ）した状態で入っていた。

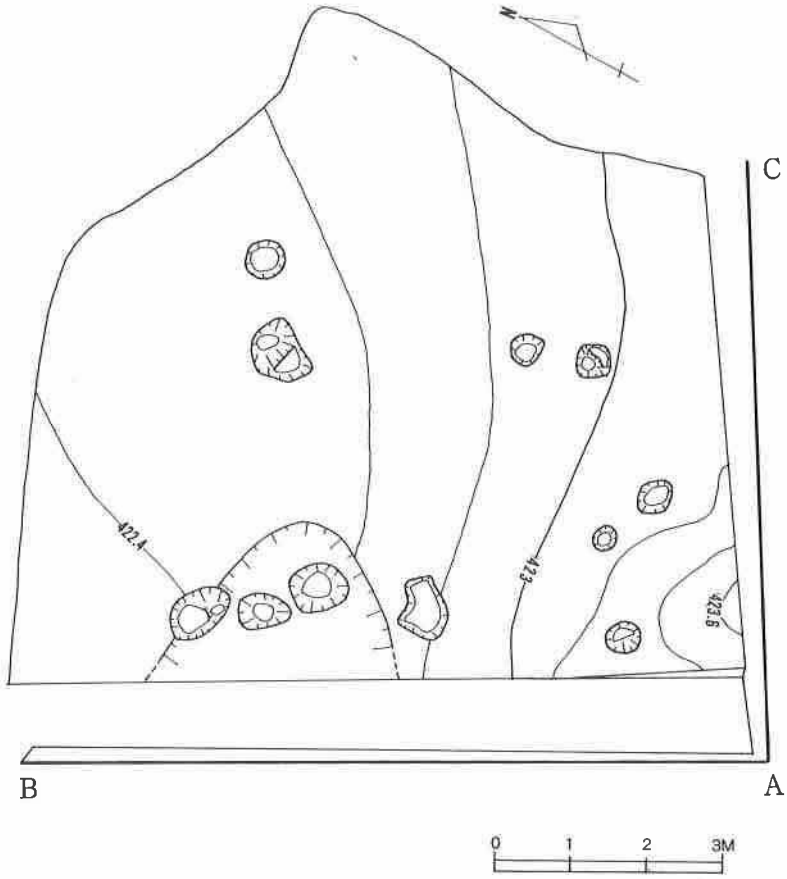
また、落ちこみ状遺構（ＳＯ1）は、南北約３ｍ、東西約２ｍで、東に深くなっており、西側は浅く消えている。粘り気の強い黒色腐植土が埋土となっていた。ここからは、２点のやや大きめの土器片を検出したが、２点とももろくなっており、原形を留めていない。



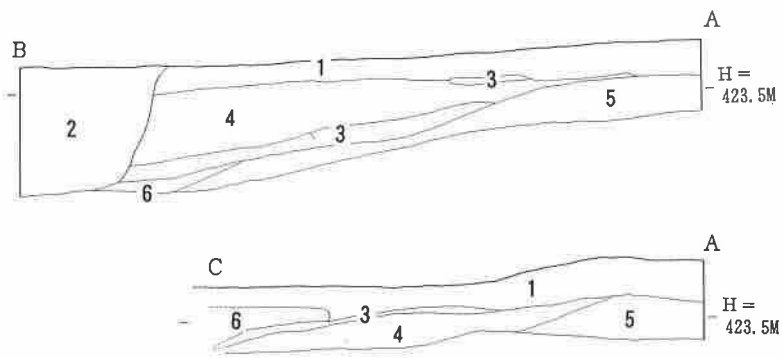
第７図　調査区位置図



第８図　調査区平面図



第９図　検出遺構平面図



1．耕　土　　4．茶褐色粘質土
2．かくらん層　　5．黄茶色砂質土
3．黒色土　　6．礫　層

第10図　土層断面図（スケール第9図と同じ）

第5章　出　土　遺　物

次に当調査で出土した遺物について説明を加える。起し又遺跡発掘調査で出土した遺物は、縄文式土器と石器であり、縄文式土器は全て破片で、全体を復元できるものはなかった。その総量は整理用コンテナ約３箱に相当する。

出土遺物のほとんど全てが、黒色の腐植土層（包含層）から出土した。所属時期は、早期・中期・後期に該当する。

時期決定の可能な土器76点のうち、早期に属する土器はわずか１点のみで、中期に属する土器が全体の約40.8%、後期に属する土器が全体の約57.9%を占める。型式別にみると、早期の穂谷式、中期の船元・里木式、後期の中津式・福田ＫⅡ式・北白川上層式・元住吉山式などのほか、飛騨地方からもちこまれたものかと考えられるものがある。

石器はチャート製の石鏃ほか２点であった。

ここでは、早期・中期・後期の順に土器の詳細について記載する。各時期で型式が決定できるものについては型式別に記載した。

縄文式土器

（早　　期）

穂谷式土器

(1)は、当遺跡からただ１点出土した縄文時代早期に所属する土器で、おそらく頸部に近い部分と考えられる。

器壁の厚さは約9.5㎜で厚手の土器である。外面は暗茶褐色、内面は明茶褐色を呈す。胎土は１㎜大の石粒を含むものの、良好な土が使用されている。焼成は固く締まっている。また、混和材としての繊維の混入が認められる。

文様構成は、角度がゆるやかで波形を呈するなだらかな山形文を、横位帯状とそれに直交して垂下する縦位帯状に施文している。施文の順序は横位→縦位で、縦位の施文が横位の最下段の１条を壊して施文している。垂下する山形文は、一定の間隔で施文されているものと考えられるが、この土器の無文帯は26㎜を残して欠けているため不明である。また、内面はきれいに調整されており、文様などは施されていない。

押捺痕から復原した山形文原体の長さは約16㎜で、３条の山形文を刻む。１単位の山形文の軌跡の幅は約13㎜、凸面の幅は1.5㎜、凹面の幅は２㎜である。縦位と横位の施文原

体は同じものである。

この横位山形文の上端を壊して、幅６～７㎜の竹管状工具による沈線が、少なくとも２本施されている。上の沈線はわずかに痕跡を残しているのみで、明確なことは判らない。この２本の沈線間は約４㎜を計る。この沈線内には、７～９㎜の間隔で押し引きがおこなわれている。

この土器は、早期中葉の穂谷式に該当すると考えられる。

（中　　期）

船元・里木式土器

(2)～(6)は中期初頭～中葉の船元式土器である。

(2)はキャリパー形口縁の深鉢になると考えられるもので、口縁端部に刻目を施し、直下に貼り付け隆帯を巡らせ、その上に爪形文をもつ。爪形文の幅は平均８㎜で太く刻みに近い、地文は粗い縄文である。裏面は無文である。岡山県里木貝塚における船元Ⅰ式Ｂ類土器に相当するものであろう。(3)も粗い縄文地に波状に低い隆帯を貼り付け、その上に太い爪形文が突けられている。船元Ⅰ式である。(2)と(3)は同一個体の可能性がある。(4)は三角形に近い断面の低い隆帯が２条あり、下の隆帯は波状を呈す。隆帯上および隆帯間にほぼ真っ直の爪形文を施す。爪形文の幅は10㎜で細い。船元Ⅰ式Ｂ類土器に相当すると考えられる。

(5)は口縁端部で大きく外反する深鉢である。口縁の端部に刻目を施し、その直下にアルカ属の貝の先端部圧痕を密接して巡らせている。その下に２条の刺突列があり、下のものは波状を呈す。上の刺突の幅は約５㎜、下は約８㎜を計る。地文には貝殻擬縄文が施されている。岡山県里木貝塚の船元Ⅰ式Ｂ類に近いものと考えられるが、貝の押圧下の刺突列の原体が、里木貝塚の爪形文の例と違っている点や、内面に縄文がないこと、キャリパー状の器形をもたないことなど、里木貝塚の例と違っており、船元式の手法をベースに異系統の土器の要素が混じったものかもしれない。

(6)は器壁の厚さが最大10㎜を計る厚手の土器で、幅３㎜の粗い縄文を地文とし、竹管状工具で縦横に線がきした文様をもつ。内部にくびれた部分を作る鉢形土器と考えられるもので、船元Ⅲ式に相当するものだろう。

(7)は撚糸文を地文に波状の沈線が施されたものである。沈線の施文工具は竹管によるものかもしれない。キャリパー形土器の口縁に近いところと考えられる。(8)は薄い器壁に細い撚糸文が施されている。(7)・(8)は里木Ⅱ式に相当するものだろう。

中期中葉

(9)は出土品の中でやや異彩を放つ。器壁は厚いところで約12㎜あり、厚手の土器である。内外面とも薄茶色を呈しており、胎土は砂っぽい粘土が使われており比較的固く焼かれている。深鉢形土器の体部と考えられる。

文様構成は、幅が平均５㎜の隆線文で区画された中に沈線が施されている。２条の密接した横位隆線文の下に逆U字形のこれも密接した２条の隆線文があり、この区画内の中心に２条の縦位隆線が約５㎜の間隔をもって垂下する。この２条の縦位隆線を軸に斜行沈線が斜め上に向かって綾杉状に施されている。また、横位隆線文と逆U字形隆線文の間にも、横あるいは縦位の沈線が施されているようである。

このように地文として沈線を使う手法は、飛騨地方にある手法である。いずれにせよ中部の曽利式が変容に変容を重ねた土器と考えられ、飛騨方面から起し又へ搬入されてきた土器のようである。時期は中期の中葉かやや古いぐらいであろう。⑦

中期末葉

中期末葉に位置付けられると考えられるものについて記載する。

(10)～(13)は深鉢の胴部で、垂下する沈線を軸に斜行沈線が施文されている。中部・東海地方の加曽利E式末期の綾杉状沈線文あるいは北陸の大杉谷式にみられる葉脈状文の系統下にあるものかもしれない。(10)・(11)は約10㎜・約３㎜の間隔をもった２本の沈線を軸に斜行沈線が施されている。(12)は軸となる沈線を持たず斜行沈線のみである。(13)は幅約５㎜の垂下する隆線を軸にU字形の幅の広い沈線が斜行して並ぶようで、綾杉文の変容したものではないだろうか。

(14)～(18)は渦巻文を有する土器で、(14)は上下に扁平な渦が二重または三重にまわる口縁部で、内側を丸く納める。口縁直下の沈線は渦巻文とは別のようである。(15)は幅約５～６㎜、深さ約２㎜の沈線で施文されており、口縁端部は四角く平に納めている。(16)は縄文を地文にもち二重の渦巻がまわっている。口縁部を平に納め内側へつまみ出す。

(19)は環状突起で、端部を平に納める。その直下に孔を有し、孔の周囲に二重の浅い沈線を施し上から刺突で充填している。土器口縁部との境は薄くなっている。

(20)は沈線間を直径約4.5㎜の円形の竹管刺突で充填した文様をもつ。一応中期末に位置付けたが、後期前葉の福田KⅡ式に併行する磨消しの要素をもつ土器である可能性も考えられる。

(21)は胴部に太い沈線が垂下する浅鉢と考えられる。おそらく５本以上の沈線を１単位にして、約22㎜の間隔で数単位施文されているようである。

(22)は幅約12mmの低い隆帯に、太さ約３mm長さ約14mmの刻み目を施し、隆帯の直上に横位の沈線を、直下には２条の沈線を施している。

(23)は波状口縁の波頂部である。摩耗がひどく数状の縦位沈線が施文されている。

(24)は口縁部が肥厚している土器で外面に斜縄文を施す。口縁端部を尖りぎみに納める。

(25)は口縁部で直下に楕円形の刺突を施している。

以下、その他中期に属するものについて記載する。(26)は節の大きな縄文が施している土器の体部である。(27)・(28)は細い撚糸文を地文にもつ土器である。

(76)～(86)は底部である。当遺跡から出土した土器の底部はほとんどが平底で、時期は中期末以降に位置づけられるものと考えられる。そのうち復原可能なものは(76)～(83)で底部の直径は7.2cm～9.5cmのものが多く、小さいものは(77)・(80)の６cm弱で、大きいものは(79)の約15.5cmである。形状は(77)・(79)・(81)・(83)は底部からすぐに外反して立ち上がるのに対し、(76)・(78)・(80)・(82)は一度内弯したのち立ち上がる。特に(78)は底部の直ぐ上に明瞭な稜線をもつ。底部中央については良好に残っているものがなくやや上げ底になっている可能性もある。(78)・(83)・(84)・(85)・(86)には網代痕を残す。

（後　　期）

中津式・福田ＫⅡ式土器

(29)～(37)は後期に入って本州西部から九州北部にかけての広い範囲で分布する中津式・福田ＫⅡ式土器である。

(29)はキャリパー形の深鉢の波状口縁である。器壁は約12mmと厚く焼成は固い。文様構成は、波状口縁頂部に３条の刻み目沈線を有し、口縁直下には深い沈線間に縄文を押圧した磨消し縄文となっている。縄文帯の幅は14～19mmと広い。口縁端部はやや肥厚しており、端部に刻みを加えていることなどから中律Ⅱ式に相当するものであろう。(30)は波状口縁をもつ深鉢で、口縁直下に沈線を１条施し端部との間に縄文をつける。この沈線が胴部境に周り、波状口縁に無文の窓部をつくる。胴部の沈線はもう１条の沈線との間に縄文を残す磨消し縄文となる。(31)は(30)と同じ文様構成の波状口縁で、窓部の上下に沈線があり上の部分には縄文が施されている。内面が磨くように美しく浅鉢の可能性がある。(32)は深鉢の頸部で浅い沈線間に縄文を施す。(33)・(34)は磨滅がひどく明確ではないが、浅い沈線間に縄文を施文している。(32)～(34)の沈線間は約10mmで比較的狭い。(30)～(34)は福田ＫⅡ式古段階（中律Ⅲ式）に相当すると考えられる。(35)は18～25mmで広い間隔の沈

線間に縄文を残す磨消し縄文である。中津式に相当する。

(36)は器面の磨滅が著しく３本の沈線が施されている。福田ＫⅡ式か。(37)は底部の平な浅鉢の胴部でＵ字形の沈線の中に垂下する１条の沈線がはいる。中律式～福田ＫⅡ式の時期に相当するものか。

後期初頭～前葉

後期初頭から前葉に属すと考えられるものを一括する。

(38)～(41)は縦沈線を施した土器で、(38)は頸部の屈曲部に櫛目状の沈線を施す。(40)は約12㎜の間隔をおいて７本を１単位とする沈線を施す。(41)は端部を丸く納めた口縁部で約21㎜の間隔で櫛目状の沈線を施す。(42)は山形突起を有すると考えられる深鉢の口縁部で、口縁直下に沈線が施されており磨消し縄文の上端の可能性がある。(43)は山形突起で外面は弧状の沈線が２条、内面は１条あり、それぞれの沈線内に刺突を巡らす。中期末から後期初頭に位置づける。

北白川上層式

(44)は３条の沈線間に縄文を施すもので北白川上層Ⅱ式～Ⅲ式に比定する。(45)は縁帯文土器の口縁部で、肥厚した口縁部に斜めに交差する沈線で菱形の文様を描く。口縁と頸部の境に横位沈線を施している。北白川上層Ⅱ式～Ⅲ式に相当するものであろう。(46)は端部を肥厚した口縁部である。北白川上層Ⅰ式～Ⅲ式に位置づけた。(47)・(48)は口縁内面に施文する深鉢で、外面は無文である。口縁部内面のみに１条の沈線を引き、それに斜縄文を施している。北白川上層Ⅱ式～Ⅲ式に相当するものであろう。(49)は横位沈線の下に緩く曲がった縦沈線を施す。おそらく深鉢の胴部区画の文様部分でこの上に頸部の屈曲がくるものであろう。北白川上層Ⅱ式～Ⅲ式に相当するものであろう。(50)は太い沈線を４条もつ土器で、北白川上層Ⅱ式～Ⅲ式に位置づけた。(51)は「く」字形の口縁をもつ浅鉢である。口縁部下に２条の横位沈線をもち沈線間を刷毛目で充填している。この文様は磨消し縄文の要素をもつものとも考えられる。北白川上層Ⅲ式に相当するものであろう。

元住吉山式

北白川上層式土器に続く縁帯文系土器で後期中葉に位置する。

(52)は緩やかな波状をなすと考えられる深鉢の口縁部である。やや内側に屈曲した幅の広い口縁で、その上下に竹管状工具による２条の沈線が施され幅約33㎜の凸帯がつく。おそらく波頂部の中間にくるものであろう。(53)は半截竹管文が多用された深鉢に口縁部で

４本の沈線と連続刺突による波状文が施文されている。元住吉山Ⅰ式に相当するものであろう。(54)は口縁内面のみに文様をもつもので、(47)・(48)のように沈線がなく斜縄文から斜めの刻み目帯に変化しており元住吉山Ⅱ式に相当するものか。一応後期中葉におく。

後期前葉～中葉

(55)～(65)は後期の前葉に属するものと考えられる。

(55)はＬ字の沈線を施すものでやや屈曲した頸部に当たるものと考えられる。(56)・(57)は磨消し縄文を施したものである。(58)は２本の沈線間を刺突で充填しており磨消し縄文の要素をもつものかもしれない。(59)はキャリパー形土器の胴部と考えられるもので、斜め沈線を３条ほどこす。(60)は屈曲する深鉢の胴部と考えられるもので、巻貝による細い擬縄文がほどこされている。擬縄文が多用される前葉の終末頃と考えられる。(61)・(62)は山形突起で前葉から中葉のものであろう。(61)には逆Ｃ字形の刺突列が３条ある。(62)は円形に刺突を施す。(63)～(65)は縦と斜めにはしる雑な沈線が施文されているもので後期前葉のものと考えられる。(63)・(65)は器壁の薄い口縁部である。

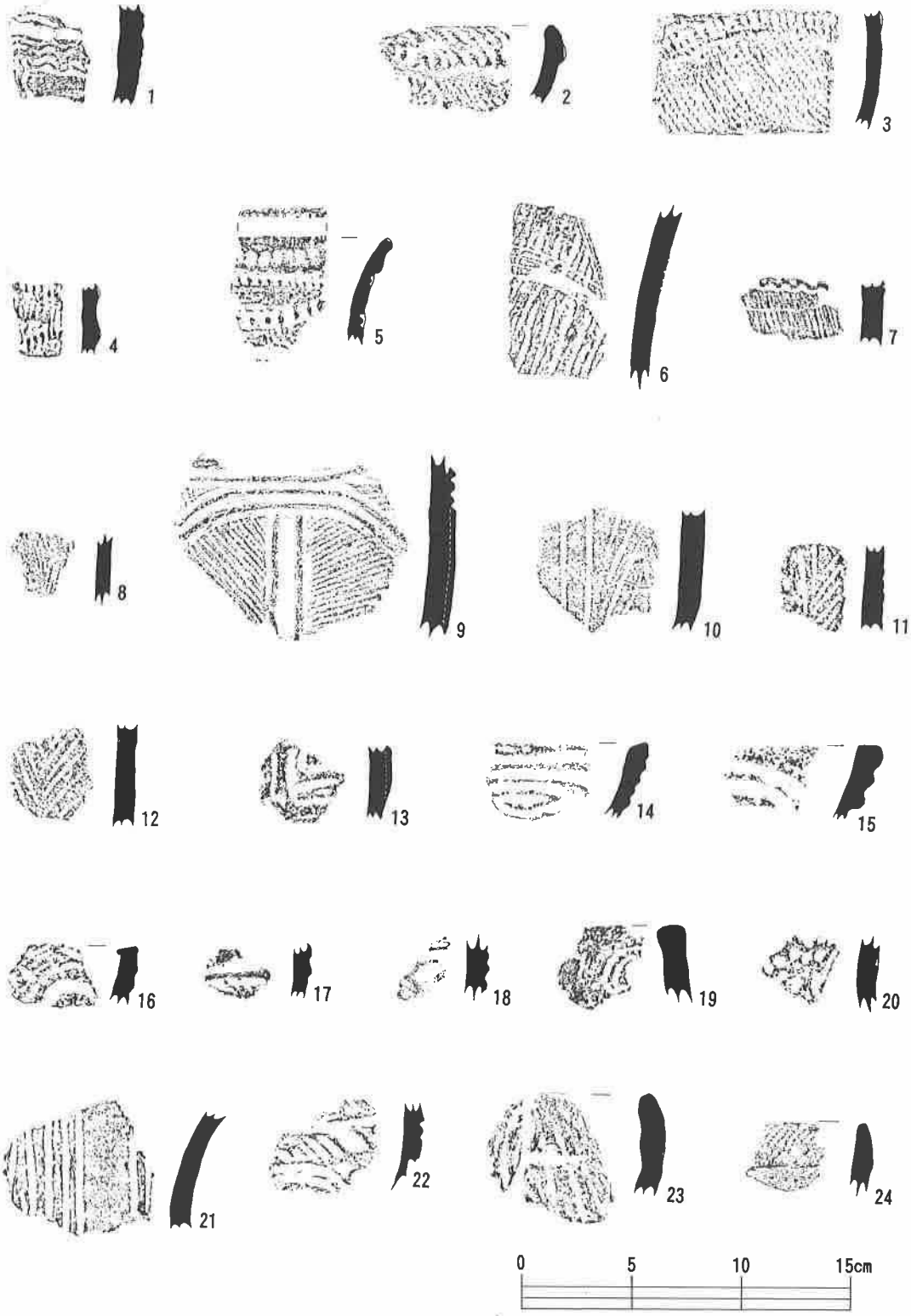
(66)～(75)は後期中葉に属すと考えられるものを一括した。

(66)は縁帯文土器の口縁部と考えられる。口縁下に沈線を施し端部との間に幅約10㎜の沈線をつける。(67)は器壁の厚い土器で約５㎜の横位沈線を施す。(68)は全面縄文を施したものである。(69)～(71)は縦位沈線を施すものである。(72)は口縁部直下に１条、その下に１条の沈線と刻み目文を施す。おそらく刻み目の下に沈線があり磨消し縄文に変化する前段階のものかもしれない。中葉の早い時期におく。(73)は浅い撚糸が地文に施されているようであるが磨滅がひどくはっきりしない。(74)・(75)についても後期に属するものと考えられる。

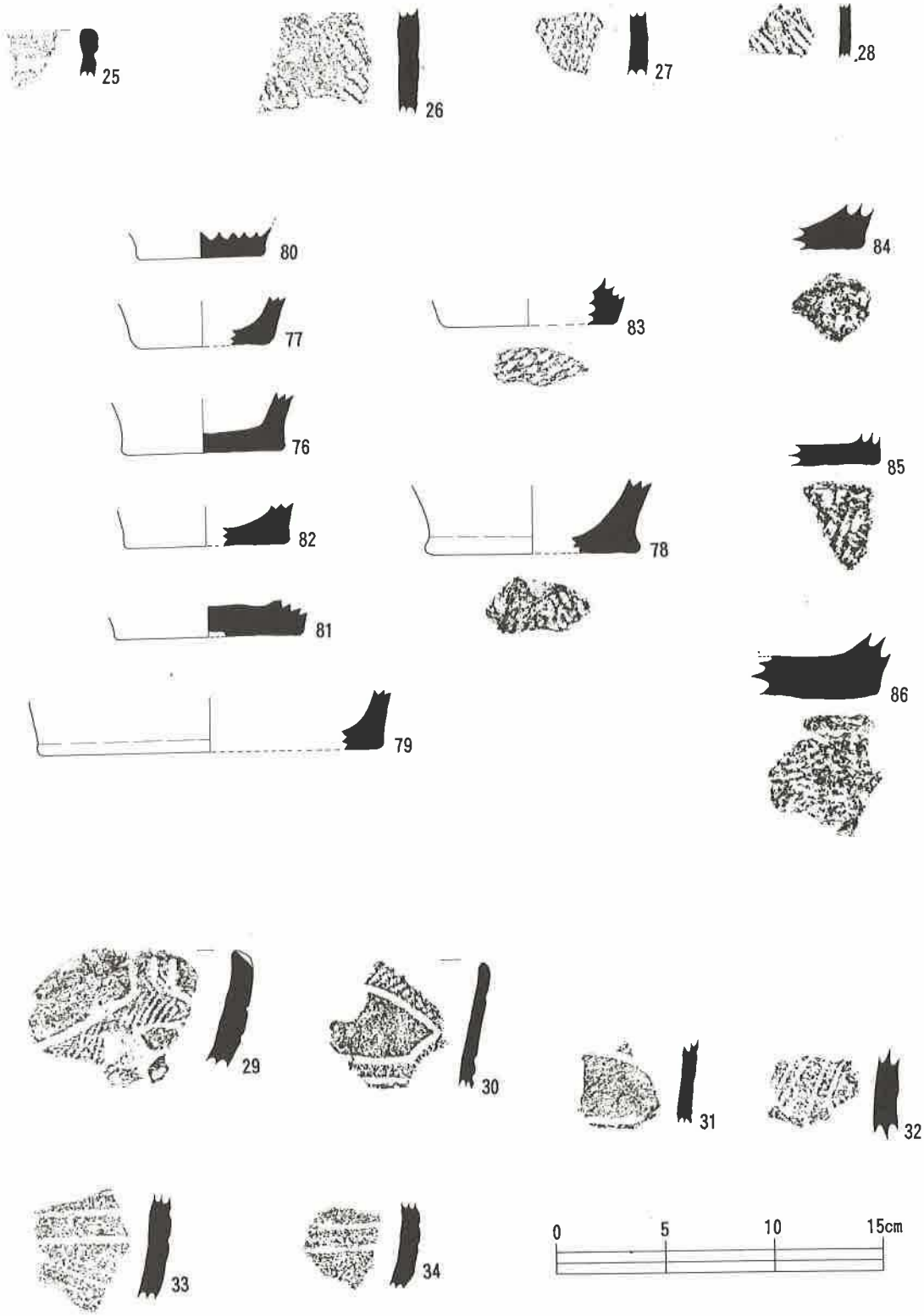
石　　器

(1)は石鏃である。石材は赤色系に白が混じるチャート製の大きめのもので、基部の形状は抉り入りのある凹基無茎になっている。先端部と一方の脚部を欠く。石質に粘りがあり明瞭な剥離面がないが、一応完成品であると考えられる。

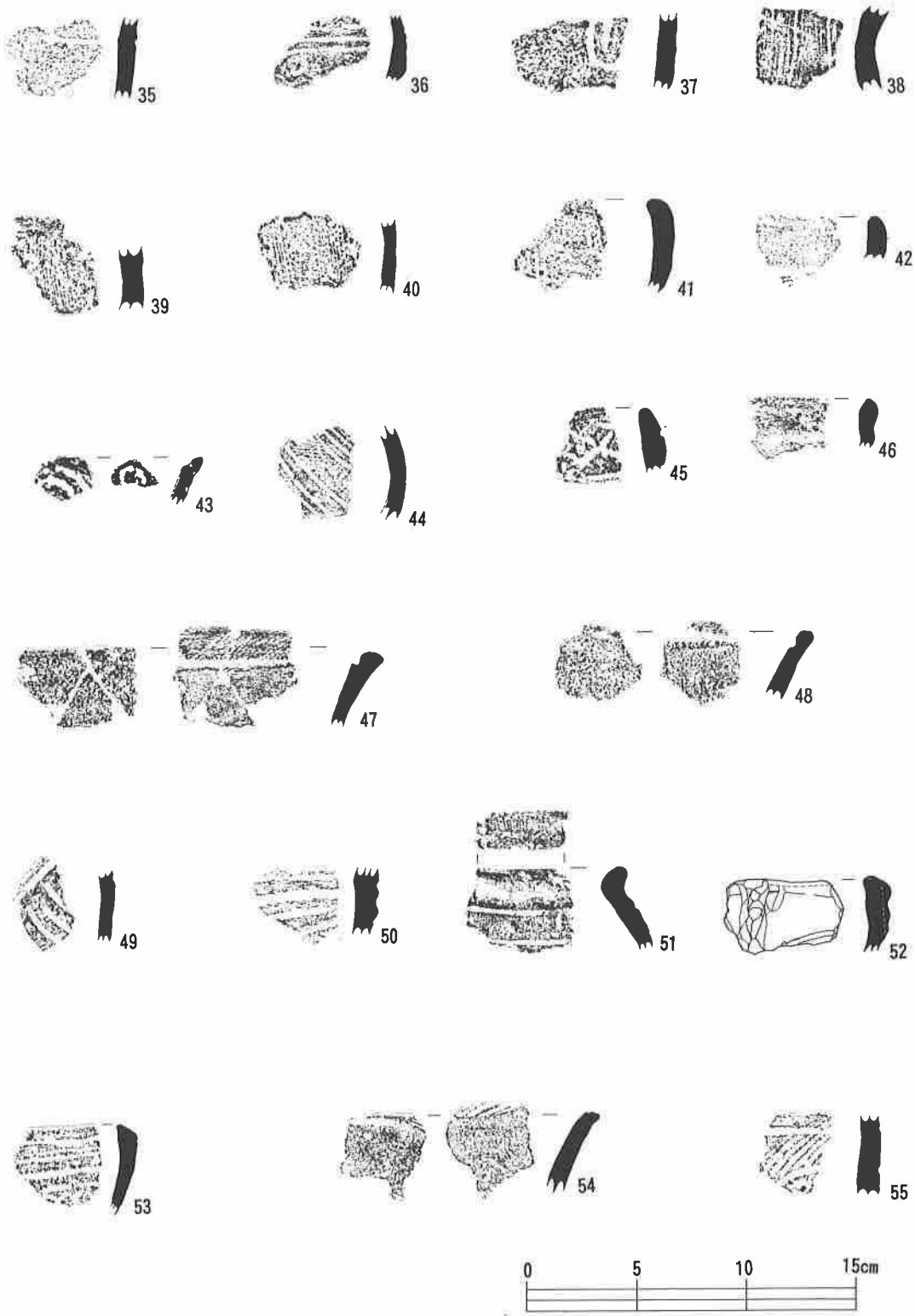
(2)は一応石棒的なものとするが決め手はない。石材は硬砂岩と考えられる。表面は磨いたように滑らかで、先端に打撃をうけた痕跡がある。断面は角のとれた台形を呈す。
両方とも包含層よりの単独出土である。(3)はＰ４から出土したチャートの剥片である。



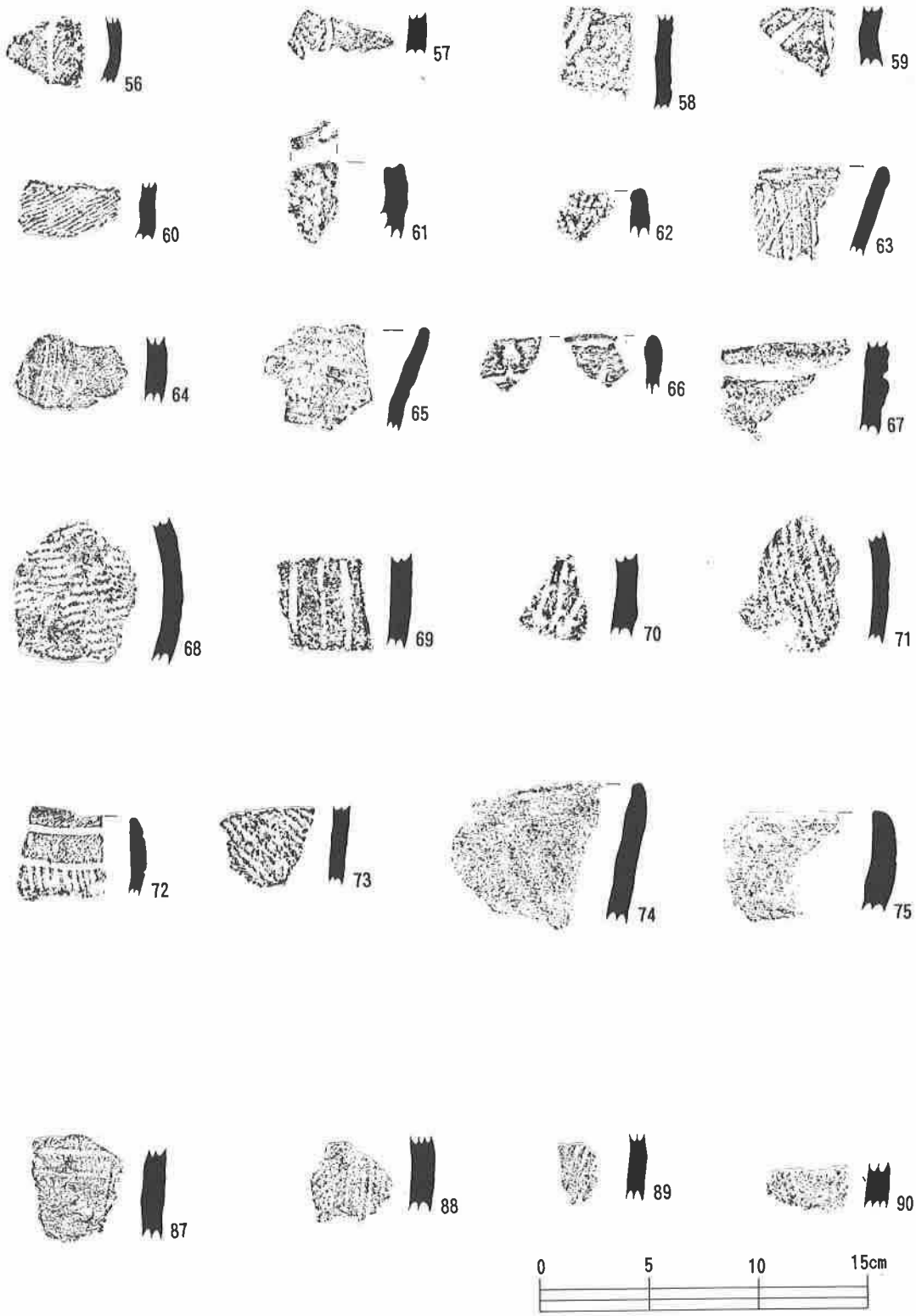
第11図　出土遺物（土器 1早期、2～24中期）



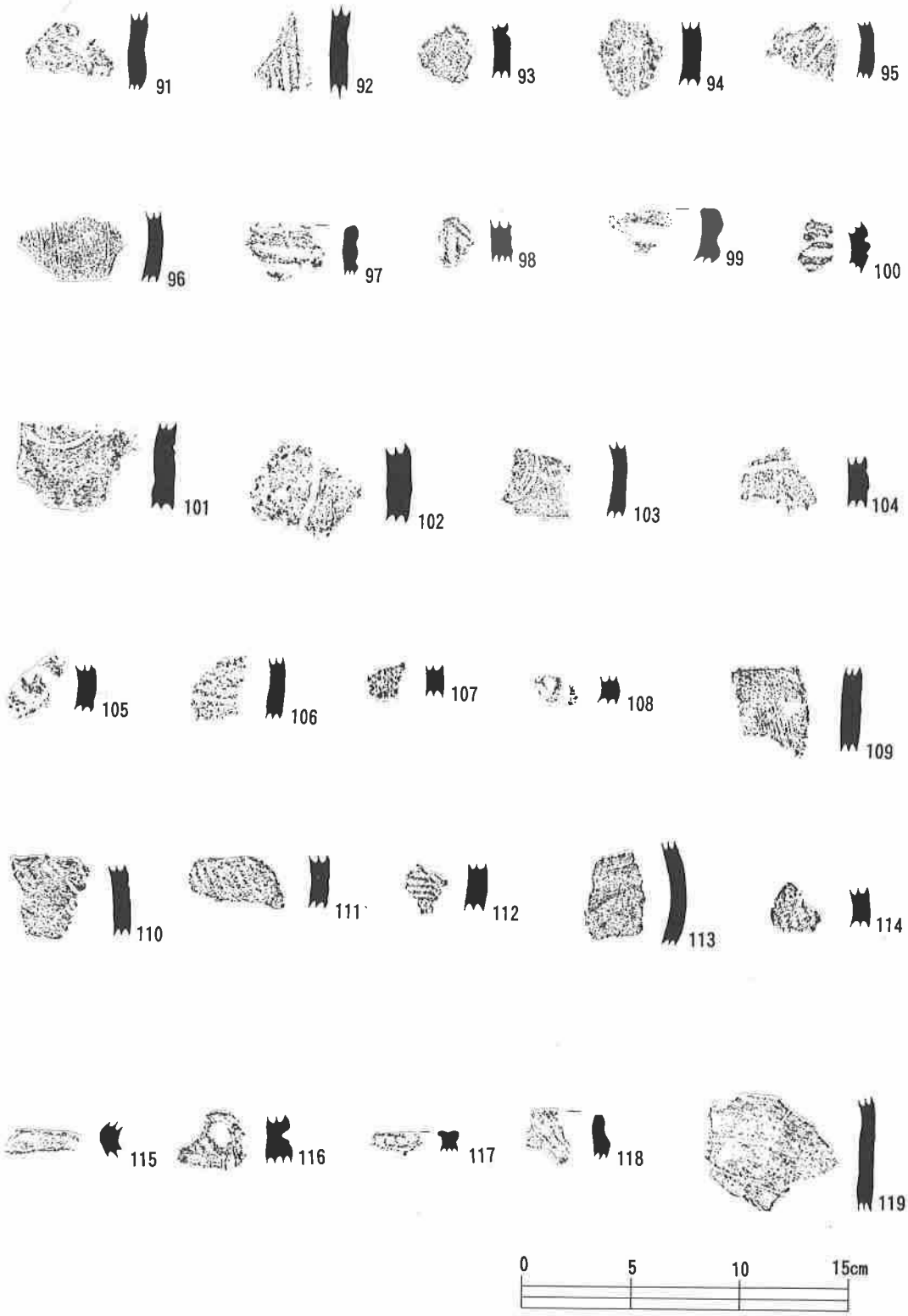
第12図　出土遺物（土器　25～28.76～86中期、29～34後期）



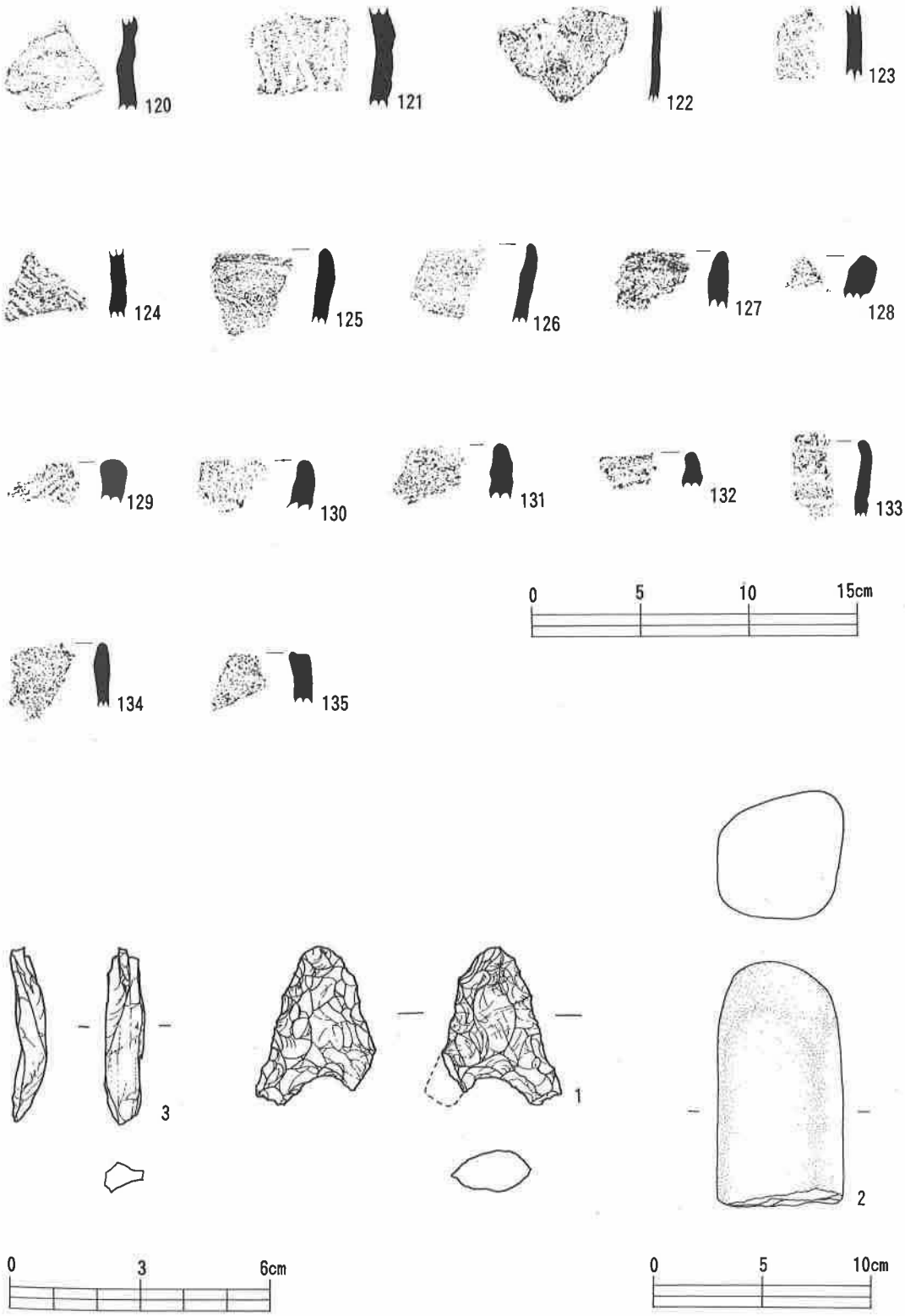
第13図　出土遺物（土器　後期）



第14図　出土遺物（土器　56～75後期、87～90時期不明）



第15図　出土遺物（土器　時期不明）



第16図　出土遺物（土器　時期不明・石器）

第6章　ま　と　め

今回の調査の結果、姉川の上流部において縄文遺跡の存在を確認することができた。遺構面の検出は遺跡全体の極一部であったために生活の痕跡といえるものを見つけることはできなかったが、出土した土器群は、縄文時代早期中葉の穂谷式から後期中葉の縁帯文土器まで、前期を欠くものの中期初頭から後期中葉まではほぼ継続して遺跡が営まれていたことが確認できた。特に今回の調査では縄文時代以外の遺物が全く出土しておらず、それだけに良好な縄文遺跡と捉えることができる。また、土器に比べてその他の遺物（石器等）の出土が僅かであったため、今回の資料から起し又縄文人の生活の復原を試みることは困難で、今後の調査を待たなければならない。

ここでは、まとめにかえて以下考察をしたい。

土器について

当遺跡から出土した土器群はおおむね西日本的な色彩を強くもつ。

早期は穂谷式土器片が1点のみであった。

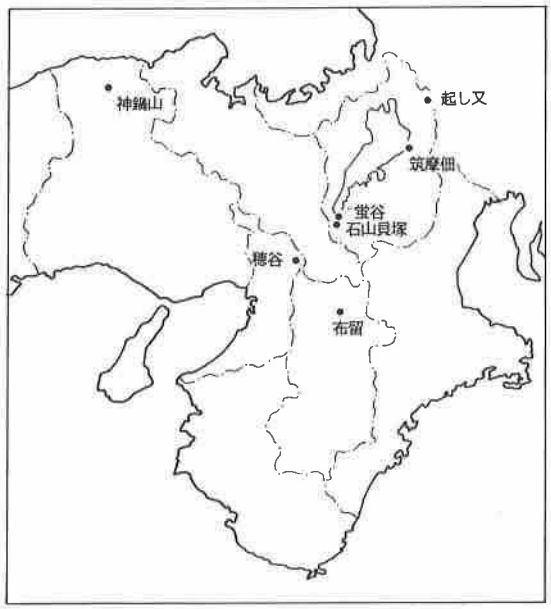
少し長くなるが、穂谷式土器について、これまでの諸先学の研究をみてみたい。穂谷式は、大阪府枚方市穂谷遺跡を標式遺跡とする土器で、近畿地方の押型文系土器様式の中では高山寺式に後続するものとされ、押型文系土器様式の最終末のタイプである。この時期の土器を出土する遺跡は激減しており、可児通宏氏は「すでに後続の土器様式に座をゆずっていて、折衷型の土器様式としてかろうじてこの時期に姿をとどめたものとも考えられる」⑧と述べており、他の押型文土器様式とくらべて特殊なものであるといえる。

穂谷式土器の分布は、岡田茂弘氏によると「岐阜・高知県で近似した土器が発見されている」⑨ようで、広い分布が考えられるが、良好な資料は少なく、兵庫県城崎郡神鍋山遺跡や奈良県天理市布留遺跡などで穂谷式の資料が出土している。滋賀県内では、穂谷式としてはじめて学界に紹介された石山貝塚（大津市）をはじめ螢谷遺跡（大津市）・筑摩佃遺跡（坂田郡米原町）などに出土例がある。いずれも湖底あるいは湖岸に立地する遺跡であり、起し又遺跡のように標高424mをはかる山間部からの出土は注目すべきであろう。

石山貝塚を調査された坪井清足氏によると、この穂谷式土器は、「全形は不明であるが、やや外反した口縁とその下に刻み目をつけた突帯をつけ、両者の中間及び口縁内側に大きな山形押型を横位につけ、下方の突帯以下を幅3㎜ほどの線状刺突文で複合鋸歯文状の文様をつけた土器」としている。また、「センイは含まない」⑩としている。標式遺跡であ

る穂谷遺跡からは当初２片しか出土しておらず、『枚方市史』によると「振幅の非常に少ない波状に近い山形押型文」⑪となっている。1990年に遺跡の北端部で発掘調査が行われ穂谷式土器が出土している。報告書で見るかぎり縦横にはしる大型の山形文を持つもので、山形文以外の文様は見られない。⑫　また、芦屋市郷土資料室に所蔵されている穂谷遺跡採集資料を検討された森岡秀人氏は「穂谷式は型式名のみが縄文土器近畿編年史上一人歩きしてきた観が強く、今日なお定義はもちろんのこと、総体的な型式内容すら捉えきれていないのであり、穂谷遺跡自体からはこのたびの未公表資料を含めても、1954年設定時の典型品を摘出し得ない状況を痛感」⑬すると述べられている。神鍋山遺跡の資料は、口縁内外に横走する山形文が施文され、外面の口縁端から数cmのところに刻目突帯を付したものである。その他にも、口縁部外面に押引き気味の線状刺突列が施文され、内面に横位の山形文が施文された例などがあり穂谷式と考えられている。⑭　布留遺跡の資料は、口縁部の隆帯上に山形文を施文あるいは隆帯上にＤ字形の刻みを施し、口縁部以下が縦位施文の例や、口縁部を肥厚させたような隆帯をもつ例などがあり、内面は口縁部に横位山形文が施されている。報告では「いわゆる穂谷式であるが、本遺跡から出土した土器はこれまでにない種類の土器」ととらえ、口縁部の形態における違いから、「穂谷式土器の再検討」⑮を要請している。また、筑摩佃遺跡の資料は、山形文の下に刺突列をはさんで２条の押し引きが施されたものである。⑯

このように穂谷式と称される土器は、押型文と突帯、刺突文、沈線文、複合鋸歯状文などを施すもので、いろいろなバリエーションがあり、今後の分類研究によっては穂谷式から別の型式が成立する可能性も考えられる。しかし、押型文に他の文様をプラスしたものを大きくまとめて「穂谷式」と設定してしまってよいのではないだろうか。いずれにせよ、可児氏が述べておられるように「折衷型の土器様式」として分類すべきか。今後、各地の調査で好資料が増加することを期待したい。



第17図　各遺跡位置図

湖北地方の縄文時代早期は押型文系の葛籠尾崎式土器の標式となる葛籠尾

崎湖底遺跡（湖北町）を初現とする。続いて高山寺式土器を出土した黒田永山遺跡（余呉町）・法勝寺遺跡（近江町）・磯山城遺跡（米原町）や坂口遺跡（余呉町）があり、⑰ 当遺跡の穂谷式はこれらに後続するものである。さらに磯山城遺跡では押型文に続く条痕文系の土器が多量に出土した。これらの遺跡を見ると、余呉町内の２遺跡は余呉湖に続く標高150m～160mの段丘上に立地するほか、琵琶湖岸・湖底に立地する遺跡がほとんどである。

湖岸沿いの前期遺跡の衰退後、「縄文時代中期には湖北の伊吹山麓に一小文化圏が成立」⑱したとされる伊吹山麓地域において、標高約420mの山間部で早期遺跡の存在が予想されることは湖北地方の縄文時代早期観に一石を投じるものである。但し集落的な遺跡ではなく一時的なキャンプ地である可能性が高い。

中期初頭から中葉の出土土器は船元・里木式に代表される瀬戸内系土器が主流を占めている。しかし、中葉以降は北陸系あるいは中部・東海系の葉脈状文をもつ土器や飛騨地方からの搬入品と思われるものなど、広範囲の交流があったことを示す土器が出土している。特に北陸・中部地方との関係については伊吹山地を挟んだ西美濃の山間部の状況も合わせて考える必要があるだろう。この件については後述する。

後期は再び中津・福田ＫⅡ式の磨消し縄文をもった瀬戸内系土器が主流を占めたのち、近畿地方の北白川上層式、元住吉山式といった縁帯文土器が主体となり、中期のように他地域の影響を明確にうけた土器はみられない。この点は同じ坂田郡内の磯山城遺跡の後期の状況と規模は違うものの同じである。

当遺跡では後期中葉以降に属する遺物がおそらくないと考えられることから、この時期になんらかの理由で終焉しているようである。

伊吹町内の概観

伊吹町内の縄文遺跡は近年おこなった分布調査の結果16ケ所を数える。⑲ しかしその殆どが地表面採集によるものであるので、時期や土器の型式がわかる遺跡は起し又遺跡を加えてもわずか５ケ所である。

確実に早期に属すのは今のところ起し又遺跡のみであるが、大字弥高に所在する東野遺跡からは早期の押型文土器に伴って出土する異型局部磨製石器（通称トロトロ石器）が採集されており、伊吹山南麓の扇状地上にも早期遺跡が存在する可能性がある。前期に属する遺跡は今のところ発見されていない。滋賀県内の状況を概観しても前期の遺跡の殆どは湖岸あるいは湖底に立地しており、山間部は空白になっている。中期に入ると町内の諸遺

跡において他地域との活発な交流がみられる。起し又遺跡や伊吹遺跡のように姉川沿いの山間部に立地する遺跡からは船元・里木式など瀬戸内系の土器群が主体を占め、北陸や飛騨の土器がこれに混在する。逆に伊吹山南麓の扇状地に立地する井の田遺跡は、時期的には起し又遺跡に後続するものであるが、東海系の中期後半の土器群が継続して存在しており、わずかに在地の醍醐式などが含まれている。東西文化の接点というよりも、美濃地方の文化そのものであるといえる。わずか20kmたらずの本町域の北部（山間部）と南部（扇状地部）で異質の土器群をもつ遺跡が成立していたことがわかる。後期になると起し又遺跡において前葉は瀬戸内系土器が主流をなし、中頃になると近畿系土器にかわる。井の田遺跡においても同様に北白川上層式が出土している。全体に中期のように東日本との交流はみられない。晩期に入って湖北の縄文文化の最後を飾るように杉沢遺跡が成立する。この遺跡は井の田遺跡の立地する扇状地の扇端に立地し、東日本的な要素をもつ遺跡である。

しばしばいわれるように坂田郡は東西日本および北陸文化の接点に位置する。上記のように坂田郡の東端にある本町内の遺跡も特に中期、晩期においてその特徴を明確にみせている。そのルートについては従来関ケ原盆地と湖岸地域を結ぶ地溝状の通谷「関ケ原低地帯」が考えられていたが、今回の調査の結果、伊吹山系の尾根道や峠道をつかったルートの存在が浮かび上がってきた。[20]

現在の車社会にあっては、姉川の峡谷奥深くに位置し、どんづまりの観すらする起し又遺跡も、縄文時代にあっては近畿・瀬戸内地方からの文化の東への出口であり、中部・北陸文化の近畿への最初の入口に当たっていたのではないだろうか。

〈註〉

1　伊吹町史編さん委員会編　1992

2　髙橋順之　1992

3　河井勇之助　1974

4　註２と同じ。

5　木村至宏他編　1991

6　註２と同じ。曲谷石臼関係の文献には下記のものなどがある。

三輪茂雄　1975　「近江曲谷臼を訪ねて」（『民俗文化』 145）

1977　「粉砕機の元祖　西仏房ー滋賀県曲谷遺跡第２次調査」（『粉体と工業』9-7）

1977　「近江曲谷臼産地調査報告」（『民俗文化』 169）

7　滋賀県教育委員会・中村健二氏および金津町教育委員会・木下哲夫氏の御教示による。

8　可児通宏　1989

9　岡田茂弘　1965

10　坪井清足　1956

11　片山長三　1976

12　枚方市文化財研究調査会　1992

13　森岡秀人・和田秀寿　1984

14　神鍋遺跡調査団　1969

藤井裕介・安久津久　1970

15　埋蔵文化財天理教調査団　1988

16　米原町教育委員会・中井均氏の御好意により実見した。

17　中井　均　1986

18　谷口義介　1986　「伊吹山麓の小文化圏－醍醐遺跡」（『北近江の遺跡』）

19　註２と同じ。

20　付論参照

〈参考文献〉

泉　拓良　1982　「西日本縄文土器再考」（『考古学論考ー小林行雄博士古稀記念論文集』）

1988　「船元・里木式土器様式」（『縄文土器大観』3)小学館

1989　「縁帯文土器様式」（『縄文土器大観』4)小学館

泉　拓良・家根祥多　1985　「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」（『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲ）京都大学埋蔵文化財研究センター

泉　拓良・松井　章　1989　『福田貝塚資料ー山内清男考古資料２』奈良国立文化財研究所

伊吹町史編さん委員会編　1992　『伊吹町史　自然編』伊吹町

植田文雄　1990　『能登川町埋蔵文化財調査報告書第17集　今安楽寺遺跡』能登川町教育委員会

大江　命　1965　『飛騨の考古学Ⅰ』福応寺文庫

岡田茂弘　1965　「縄文文化の発展と地域性ー近畿」（『日本の考古学』 2)

片岡　肇　1974　「近畿地方における押型文土器文化について」（『平安博物館研究紀要』5）
　　1981　「押型文土器」（『縄文文化の研究』3)雄山閣
片山長三　1976　「枚方の遺跡と遺物」（『枚方市史』1)大阪府枚方市
可児通宏　1969　「押型文土器の変遷過程ー施文原体の分析を中心とした考察」(『考古学雑誌』55-2)
　　1989　「押型文系土器様式」（『縄文土器大観』1)小学館
河井勇之助　1974　「姉川源流地域の歴史」（『姉川源流学術調査報告書』）滋賀県
神鍋遺跡調査団　1969　『神鍋遺跡』兵庫県日高町教育委員会
木下哲夫　1985　「大杉谷式小考」(『古代深叢Ⅱー早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集』)
木村至宏他編　1991　『滋賀県の地名』（日本歴史地名体系25）平凡社
京都大学文学部考古学研究室編　1991　『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館
小松　虔　1976　「栃原岩陰遺跡の押型文土器」（『長野県考古学会誌』27）
末木　健　1988　「曽利式土器様式」（『縄文土器大観』3)小学館
第12回三重県埋蔵文化財展研究会資料　1992　「前半期押型文土器の諸問題」
髙橋順之　1992　『伊吹町内遺跡分布調査報告書』伊吹町教育委員会
高堀勝喜　1965　「縄文文化の発展と地域性ー北陸」（『日本の考古学』2）
谷口義介・宮成良佐　1986　『北近江の遺跡』サンブライト出版
玉田芳英　1989　「中津・福田KⅡ式土器様式」（『縄文土器大観』4)小学館
坪井清足他　1956　『石山貝塚』
帝塚山考古学研究所　1988　『縄文早期を考えるー押型文文化の諸問題』
中井　均　1986　『磯山城遺跡－琵琶湖辺縄文早期～晩期遺跡の調査』米原町教育委員会
樋沢遺跡発掘調査団　1987　『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』（郷土の文化財16）岡谷市教育委員会
枚方市文化財研究調査会　1992　『枚方市文化財年報12』（1990年度分）
藤井裕介・安久津久　1970　『神鍋山遺跡』兵庫県日高町教育委員会
埋蔵文化財天理教調査団　1988　『奈良県天理市布留遺跡縄文時代早期の調査』（考古学調査研究中間報告14）
間壁忠彦・間壁葭子　1971　『里木貝塚』倉敷考古館研究集報7
松田真一　1988　「奈良県出土の押型文土器の様相」（『橿原考古学研究所論集』8）
森岡秀人・和田秀寿　1984　「大阪府枚方市穂谷遺跡採集の縄文土器」（芦屋市郷土史料室所蔵史料紹介Part 1『郷土史料室だより　12月号』）

付　論

伊吹山地周辺の縄文遺跡

滋賀・岐阜の県境をなす伊吹山地は、伊吹山（1,377m）・金糞岳（1,317m）など 1,000m級の山々が連なり、一見すると両県を厳しく分かつ壁のようである。しかし、実際には湖北と西美濃を結ぶ数本の峠道があり、近世には糸・紙・茶・牛・石臼・炭などの両国物資の運搬などに大きな役割を果たしていたことは史料からも明らかである。① ここであえて伊吹山地の東西をひとくくりにして記述したのは、近世のみならず原始古代の昔から伊吹山中の峠道、尾根道を利用した活発な交流があったことを想定したからである。

伊吹山の周辺は縄文遺跡の多い地域といわれることがある。実際に伊吹山地周辺町村の縄文遺跡数を遺跡地図から拾いあげると下記のとおりである。②（但し、ここでの伊吹山地は北を滋賀・福井・岐阜県境の三国岳とし南端を伊吹山とする。）

（滋賀県）坂田郡伊吹町16、坂田郡山東町11、東浅井郡浅井町 4、伊香郡木之本町 5、伊香郡余呉町 2

（岐阜県）不破郡関ケ原町33、不破郡垂井町 4、揖斐郡春日村 2、揖斐郡坂内村 9、揖斐郡久瀬村 9、揖斐郡藤橋村27、揖斐郡谷汲村 1、揖斐郡池田町11、揖斐郡揖斐川町 1

この中には杉沢遺跡（伊吹町）・番の面遺跡（山東町）・醍醐遺跡（浅井町）・古橋遺跡（木之本町）・中野遺跡（関ケ原町）・宮ケ原遺跡（藤橋村）など著名な遺跡が含まれている。

本稿では、伊吹山地の懐深くに立地する起し又遺跡の性格を少しでも明らかにすべく、以下参考資料としてこの地域の主要な遺跡を紹介したうえで考察したい。

1. 伊吹（いぶき）遺跡　伊吹町小泉

姉川が平野部に出る手前の段丘上に形成された遺跡で、大正十三年に郷土史家・中川泉三が『考古學雑誌』に出土品を紹介した。平行線文・斜線文・袈裟襷文の施された石剣や石斧とともに中期初頭の船元式土器が出土している。③（標高約 250m）

2. 杉沢（すぎさわ）遺跡　伊吹町杉沢

弥高川扇状地上に営まれた遺跡で伊吹山地の南端に位置する。昭和十三年に小林行雄らにより発掘調査が行われた遺跡で、晩期後半の合口甕棺が検出されたことで有名である。

昭和62年の調査では晩期前半（滋賀里Ⅱ式並行期）の良好な一括資料が得られている。また、信濃中南部からの搬入品と思われる土器や、御物石器や石棒などの生活用具以外の磨製石器も多く東日本的な要素を多くもつ遺跡であるといえる。④（標高 165m）

3. 井の田（いのだ）遺跡　伊吹町大清水

政所川と弥高川が形成する複合扇状地に位置する。開発中に縄文時代中期後半から終末を中心として、若干後期を含む土器や打製石斧、黒曜石片などが出土した。中期の土器には東海系の咲畑式・神明式・取組式・島崎Ⅲ式・山の神式、瀬戸内の里木Ⅱ式、在地の醍醐式などがあり、後期の土器には北白川上層式がある。地理的に東西の接点に位置する当遺跡の土器群は美濃地方とあまり差がみられない。⑤（標高約 220m）

4. 番の面（ばんのおもて）遺跡　山東町柏原

伊吹山と対峙する霊仙山麓の山丘端の台地に立地する。昭和38年に発掘調査が実施され、縄文時代中期末の遺物と近畿で初めての竪穴住居跡が検出された。土器は近畿地方の編年の標式として用いられている。土器類は、沈線文を主用している点で全体的に共通性が認められる。いずれも単一の様式に統一されており、中期後半に関東地方で展開した加曽利Ｅ式に併行するものとみられている。また、竪穴住居跡の形式が東日本のものと非常に近似している点からも、当時の湖北地方が東日本文化圏の一端を担っていたと推察されている。⑥（標高約 185m）

5. 醍醐（だいご）遺跡　浅井町醍醐

草野谷中央部を南流してきた草野川が流れを西南に変える地点の扇状地上に立地する。1951～2年に京都学芸大学によって発掘調査が行われ、縄文土器片と石器類が出土し、立石を中心に裾えた配石遺構が検出された。土器の一群は醍醐式土器と呼ばれ、近畿地方の中期後葉～末にかけての標式土器となった。石器では、石錘の出土量が突出しており注目される。土器類は概ねキャリパー形口縁を有し、中期末の加曽利Ｅ式や中部高地の曽利式の影響を強く受けた渦巻文系のものが中心であるが、これに先行する瀬戸内海系の船元式・里木式の土器、後期中葉の北白川上層式土器もみられる。中期後葉から後期にわたって長期間継続し、特に中期末に興隆をみたこと、東西両文化圏の緩衝地帯として独自の土器文化を形成したことがうかがわれる。⑦（標高約 198m）

6. 古橋（ふるはし）遺跡　木之本町古橋

己高山の南西麓、高時川と大谷川によって形成された丘陵の先端に位置する。早くから知られた遺跡で中期に属す。土器は関東地方の加曽利ＥⅠ式と、瀬戸内の里木Ⅱ式などがみられる。⑧（標高約 140m）

7. 桜内（さくらうち）遺跡　余呉町坂口

古墳時代初期から奈良時代にかけての複合遺跡で、縄文時代後期・晩期の土器と石器も散布した状態で出土している。土器はいずれも破片で、後期終末の宮滝式に類似したものや、晩期の滋賀里遺跡で滋賀里Ⅰ・Ⅱ式にともなって出土する北陸系の土器などである。石鏃、切目石錘、敲石、磨石など数点が出土している。⑨（標高約 130m）

8. 中野（なかの）遺跡　関ケ原町関ケ原

伊吹山と養老の山塊に挟まれた梨の木川に面した台地上に位置する。昭和37年に新幹線敷設工事に伴い発掘調査が実施された。遺構は住居跡 4、屋外炉跡 3、積石遺構10などで、土器類は５類に分けられているが、いずれも中期後半の加曽利ＥⅡ式に併行するものであって比較的単純な時期に限定されている。⑩（標高約 115m）

9. 長尾（ながお）遺跡　垂井町岩手

伊吹山系を背後にする菩提山から南へ突きでた舌状台地に立地する。昭和48～50年にかけての分布調査で石器や土器が採集された。出土した土器は中期から後期のもので、中期には撚糸文を地文にもち沈線を施した里木Ⅱ式や加曽利Ｅ式などがある。⑪（標高約 80m）

10. 長者平（ちょうじゃだいら）遺跡　春日村美束

標高約600mの日当たりのよい緩斜地に立地する。出土した土器は大きく２類に分けられている。第１類土器は早期末の石山式～天神山式土器に比定されている表面に波状文を描くものである。第２類は裏表に条痕が施されているもので晩期末から弥生時代初めの樫王式～水神平式に比定されている。石器には石刀、敲石、磨石などがある。⑫

11. 大草履（おおじょり）遺跡　坂内村南大草履

坂内村を東流する坂内川とその支流広瀬浅又川が合流する地点に向かって延びた河岸段丘上に立地する。昭和58年に行われた土地区画整理の際に土器や石器が採集された。格子目文、市松文、山形文、楕円文を持つ早期の押型文土器で神宮寺式に相当するものや中期

の土器がある。揖斐川の谷筋で最も古い時期の遺跡といえる。⑬（標高約 350m）

12. 小曽根遺跡　藤橋村東杉原

揖斐川の左岸に注ぐ支流の小曽谷の扇状地が侵食の復活で段丘となった平地に立地する。磨製石斧、石鏃等の石器とともにヘラ状工具で弧状の沈線を描いた縄文土器片が採集されている。⑭（標高約 240m）

13. 宮ケ原遺跡　藤橋村塚（旧徳山村域）

藤橋村域を伊吹山地周辺地域とするにはやや問題があるかもしれないが、旧徳山村の遺跡群が篠田通弘氏らによる精力的な調査で明らかにされているのであえてとりあげることにしたい。

宮ケ原遺跡は旧徳山村を代表する遺跡で、揖斐川と支流の合流地点の広い河岸段丘に立地する。昭和19年の開墾で多量の遺物が出土したのをはじめ現在まで多くの遺物が採集されている。土器類は早期末の塩屋式に始まり晩期の条痕文土器で終末をむかえる。前期を欠くものの中期後葉から晩期初頭にかけて、規模の差はあるが断続的に継続することが明らかとなった。その中心は、中期後葉の葉脈文土器（大杉谷式）にあり、その直後の中津式土器も量的に多く出土している。石器は石鏃・敲石が多いのを特徴とする。⑮（標高約 400m）

14. 小屋どこ遺跡　藤橋村櫨原（旧徳山村域）

揖斐川の支流扇谷を5.2kmさかのぼった最奥部の小規模な段丘に立地する。表面採集によりまとまった量の土器や石器が発見されている。土器は早期の田戸下層式に始まって、晩期後葉の条痕文土器で終末を迎える。中心となる時代は中期で、西日本系、東海系、北陸系の土器群がまとまって流入し、複雑な状況を呈する。中期前葉の西日本系の鷹島式と北陸系の新保式、同じく船元Ⅱ式と新崎式の共存から、船元Ⅲ式、里木Ⅱ式段階にいたって関西系土器が完全に凌駕する。またこの頃に東海系の咲畑式が北上し、後葉には北陸系の大杉谷式が成立する。石器は石錘が26点と最も多い。⑯（標高約 460m）

15. 櫨原村平遺跡　藤橋村櫨原（旧徳山村域）

揖斐川と扇谷の合流地点の両河川に挟まれた段丘上に立地する。昭和53年の遺跡確認のための試掘調査で多量の遺物が出土した。土器は前期北白川下層Ⅱ式から始まり晩期の条痕文土器まで継続して存在する。土器群は前期以降後期後葉にいたるまで関西系土器群が

圧倒的優位で存在することに特徴がある。特に中期中葉の船元Ⅲ式・Ⅳ式、後期中後葉の縁帯文土器・元住吉山式・宮滝式において著しい。晩期は前葉に北陸系土器（八日市新保式）が優勢を保ったのち後葉の条痕文土器まで空白となる。⑰（標高約 350m）

16. 瑞岩寺（ずいがんじ）遺跡　揖斐川町瑞岩寺

粕川を眼下に望む段丘上にある瑞巌寺境内に所在する。後期中頃の渦巻文や口縁に併行する磨消し縄文によって飾られる土器片が出土した。⑱（標高約80m）

17. 谷際（たにぎわ）Ｊ地点　池田町宮地

揖斐川の支流杭瀬川流域の扇状地の中央部に立地する。昭和43年に採土工事の際に発見された。主な出土品は縄文時代後期の土器、合口甕棺３個体分を含む晩期前葉の土器、石鏃、磨製石斧、磨製石棒、石剣などである。⑲（標高約 100m）

18. 末福（すえふく）遺跡　谷汲村末福

根尾川の支流菅瀬川流域の谷部の水田面に位置する。昭和30年頃の河川改修工事中に中期から晩期の多数の縄文土器、２隻の丸木船、櫂等の木製品が発見された。後期の土器には加曽利Ｂ式の新しい頃に比定できるものや宮滝式に比定できるものなど、中葉から後葉にかけての良好な資料がある。⑳（標高約 100m）

これら主要遺跡の立地をみると、標高80～250mの扇状地・河岸段丘上に13遺跡が集中しており、350～450mの山間谷部に起し又遺跡と藤橋村・坂内村の４遺跡が、春日村の長者平遺跡のみが600mの高地に立地する。

時期別に分けると中期あるいは後期の土器を出土する遺跡が圧倒的に多い。それに比べて前期は２遺跡と少ない。

早期は大草履遺跡の押型文系の神宮寺式土器、同じく起し又遺跡の穂谷式土器、小屋どこ遺跡の沈線文系の田戸下層式土器、早期末になると長者平遺跡の石山式、宮ケ原遺跡の塩屋式など、すべて標高が350m以上の遺跡であることに特徴がある。滋賀県側の早期の遺跡がおおむね湖岸に集中していることと較べると対照的で、早期の起し又遺跡の在り方を伊吹山地を仲介とした東との関連で見ていく必要を感じる。

調査が実施されている遺跡が最も多い中期を取り上げてさらに考えてみたい。揖斐川流域で最も調査の進んでいる藤橋村の諸遺跡は、中期に入って、北上してきた船元式土器群が進出し優位を保つ。篠田通弘氏によると、この地域への瀬戸内、近畿土器群の進出は

前期末の里木Ⅰ式、大歳山式を初現とし、中期初頭の鷹島式の段階で集落間を結ぶ尾根道が成立し船元式土器群の進出を促したとされている。そして中期初頭に藤橋村と連絡しうる遺跡として醍醐遺跡と岐阜県美山町の九合洞穴遺跡をあげている。㉑ 特に醍醐遺跡と小屋どこ遺跡・櫨原村平遺跡の共通性を生産基盤として切目石錘㉒や船元式土器との関係から考察し、醍醐遺跡の重要な役割の可能性を示唆している。

起し又遺跡は醍醐遺跡の立地する草野谷と七尾山系をはさんだ東草野谷にあり北北東の方向にあたる。両地域は近代まで郡を同じくする同一文化圏にあり七曲道という主要道を有していた。起し又遺跡は中期初頭から中葉にかけて船元式に代表される瀬戸内系の土器群が主流を占めており先の三遺跡との共通性が強い。また、宮ケ原遺跡との関係でみると、起し又遺跡で中期末葉に位置づけた葉脈状文は、この頃北陸から宮ケ原遺跡に進出して浸透した型式であり、後期前葉になると両遺跡とも再び西日本系の中津式土器が主流を占めるようになる。㉓

このように、起し又遺跡は伊吹山地（篠田論文による「越美山地」の南部を占める）にあって、西は醍醐遺跡を介して瀬戸内地方と、東は藤橋村の諸遺跡を介し北陸・中部との関係をもちながら遺跡が成り立っていたものと考えられ、越美山地の尾根道を利用㉔した東西交流ルートの中継点的な役割も担っていたのではないだろうか。

そしてこれとは別に、中期後半には伊吹山地南端の関ケ原低地帯に分布する中期後半の長尾遺跡、中野遺跡、井の田遺跡、番の面遺跡など加曽利Ｅ式系土器や里木Ⅱ式土器が出土する遺跡を結ぶ平野部のルートがあるように見える。

以上、少ない資料から稚拙な考察を試みた次第である。（髙橋順之）

〈註〉

1　高橋俊示　1985　「近世における濃・江・越境界地方の交通－美濃側の資料を中心として」（『徳山村－その自然と歴史と文化 2』）

2　滋賀県教育委員会　1991　『滋賀県遺跡地図』

　岐阜県教育委員会　1990　『岐阜県遺跡地図』

3　中川泉三　1924　「伊吹山下の石器」（『考古學雑誌』14-13）

　島田貞彦　1928　「有史以前の近江」（『滋賀県史蹟調査報告』1）

4　小林行雄外　1938　「近江国坂田郡春照村杉澤遺蹟」（『考古学』9-5）

用田政晴　1988　『杉沢遺跡発掘調査概要報告書』伊吹町教育委員会

5　髙橋順之　1992　『伊吹町内遺跡分布調査報告書』伊吹町教育委員会

6　田中勝弘・奈良俊哉　1986　『坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書』山東町教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会

京都教育大学考古学研究会　1989　「考古学資料室所蔵遺物の資料紹介」（『史想』22）

7　京都教育大学考古学研究会　1989　「考古学資料室所蔵遺物の資料紹介」（『史想』22）

8　平凡社地方資料センター編　1991　『滋賀県の地名』

9　（財）滋賀県文化財保護協会編　1982　『滋賀文化財だより』

10　楢崎彰一　1965　「中野遺跡」（『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』）

11　大岡明臣　1976　『長尾遺跡調査とその考察』垂井町教育委員会

12　髙橋俊示　1983　『春日村史』春日村教育委員会

13　篠田通弘編　1984　『徳山村のあけぼのを求めて－岐阜県揖斐郡徳山村遺跡分布調査中間報告』徳山の歴史を語る会

14　髙橋俊示　1982　『藤橋村史』藤橋村教育委員会

15　註13　篠田通弘編　1984

16　同上

17　同上

18　吉岡　勲　1971　『揖斐川町史』揖斐川町

19　大参義一・安達厚三　1971　「縄文時代」（『岐阜県史』通史編原始）

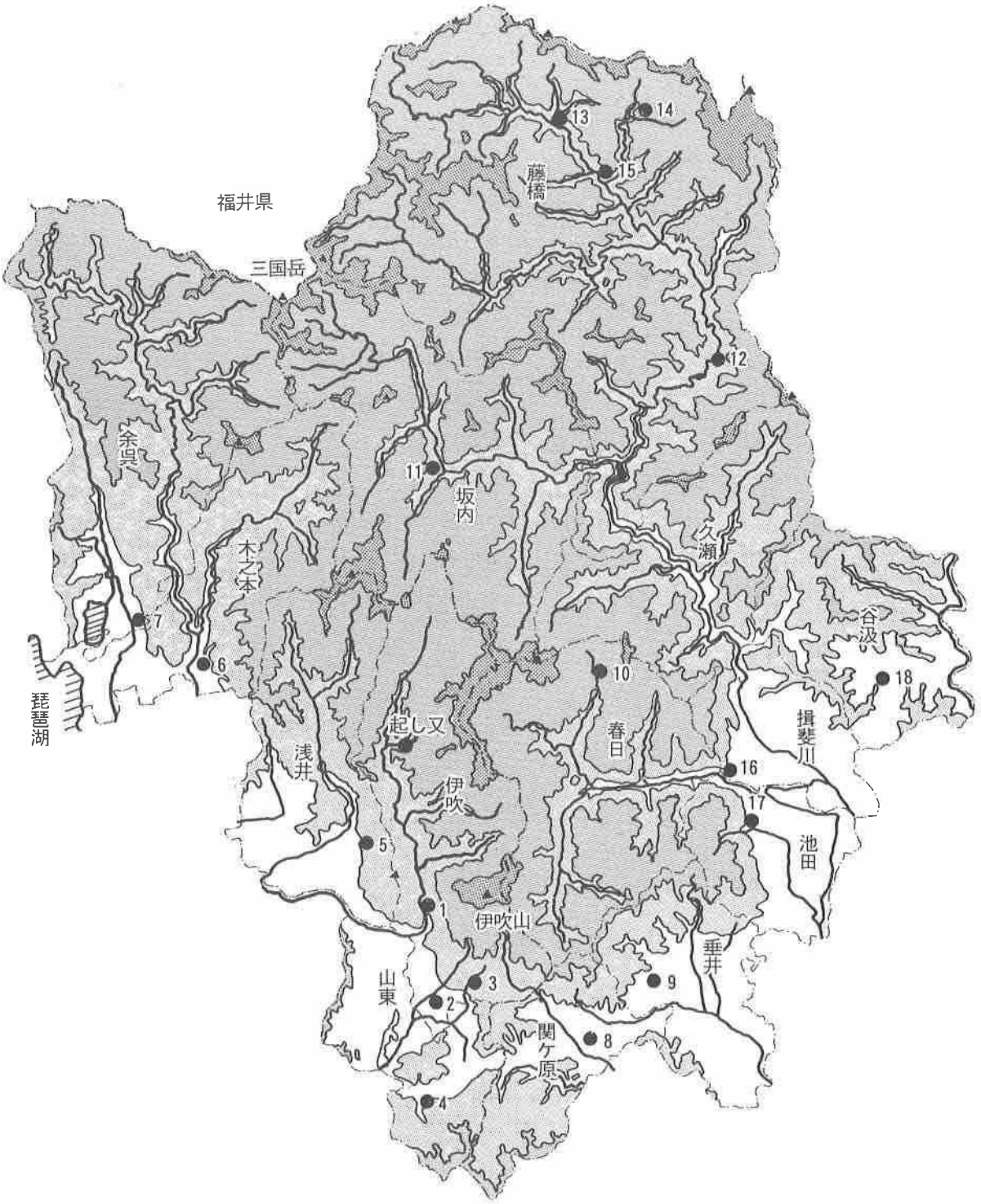
20　同上

21　註13　篠田通弘編　1984

22　伊藤禎樹・篠田通弘　1982　「美濃徳山村の切目石錘（越美山系をめぐって）－『徳山村の歴史を語る会』の活動より②」（『岐阜史学』76）

23　註13　篠田通弘編　1984

24　尾根道の利用については、伊藤禎樹・篠田通弘　1984　「縄文時代の徳山村」（『徳山村－その自然と歴史と文化－』）や、安藤正義氏の研究がある。



第18図　伊吹山地周辺の縄文遺跡（数字は付論中の番号に対応する）

あ と が き

わずか10日ほどの短い調査ではありましたが、以上のような多くの成果を得ることができました。起し又は、姉川の上流から更に山中に入った谷間ですが、初めて足を踏みいれた人が驚くほど天が広く、たくさんの生き物が生息しています。起し又川のイワナ、田んぼの水の中でうようよしているイモリ、あまり出会いたくないマムシ、調査が終了してまもなくニュースになった熊等々。休憩時間にシートに転がって県境の尾根をなんとなくみつめるのも好きでした。

起し又縄文人が山を越えて東と交流していたことを考察しましたが、かくいう私自身、考察にあたっての文献収集を殆ど隣県の岐阜県図書館で済ましました。身をもって東西交流を体験していた訳です。私事が続きますが食品をまとめ買いするのは岐阜県垂井町で、少しいいものを買うために大垣市に行ったりします。

余談が長くなりましたが、ご指導いただいた諸先生方、調査のお手伝いをしてくださった皆さん、現地説明会にお越しくださった地元の皆さんどうもありがとうございました。

今後もよろしくお願いします。

図　　版

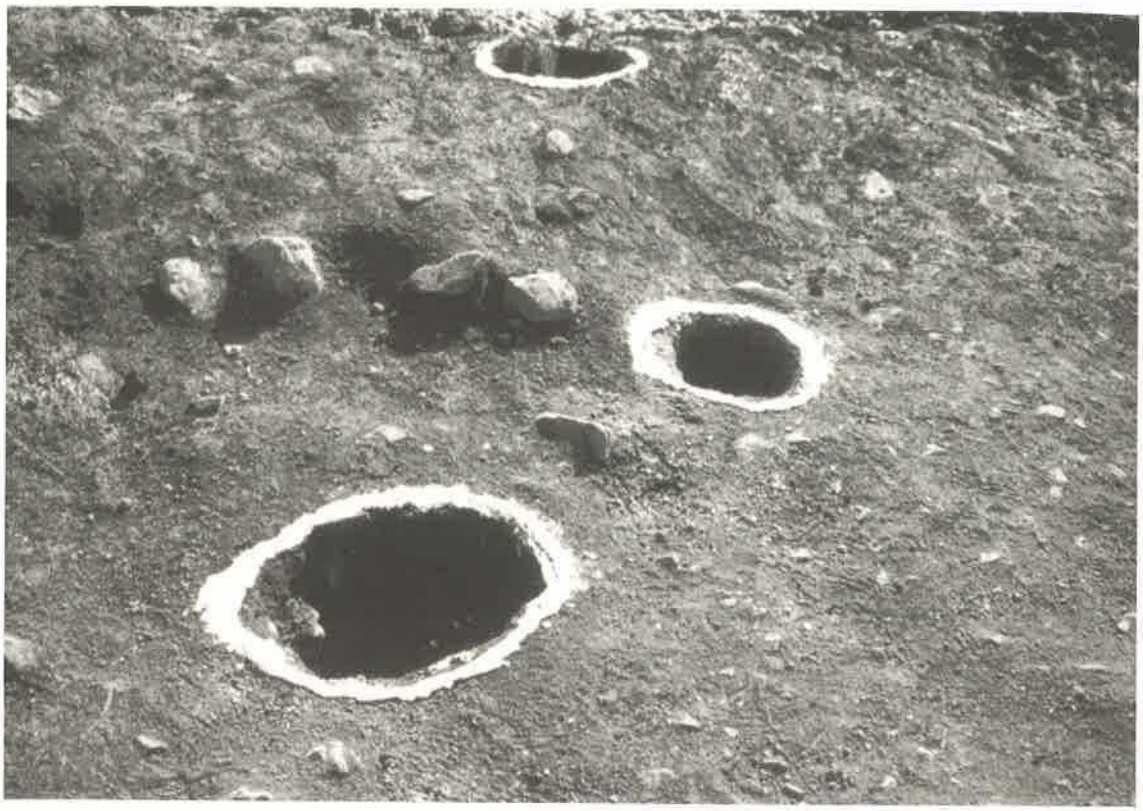
調査地周辺航空写真

調 査 前 状 況

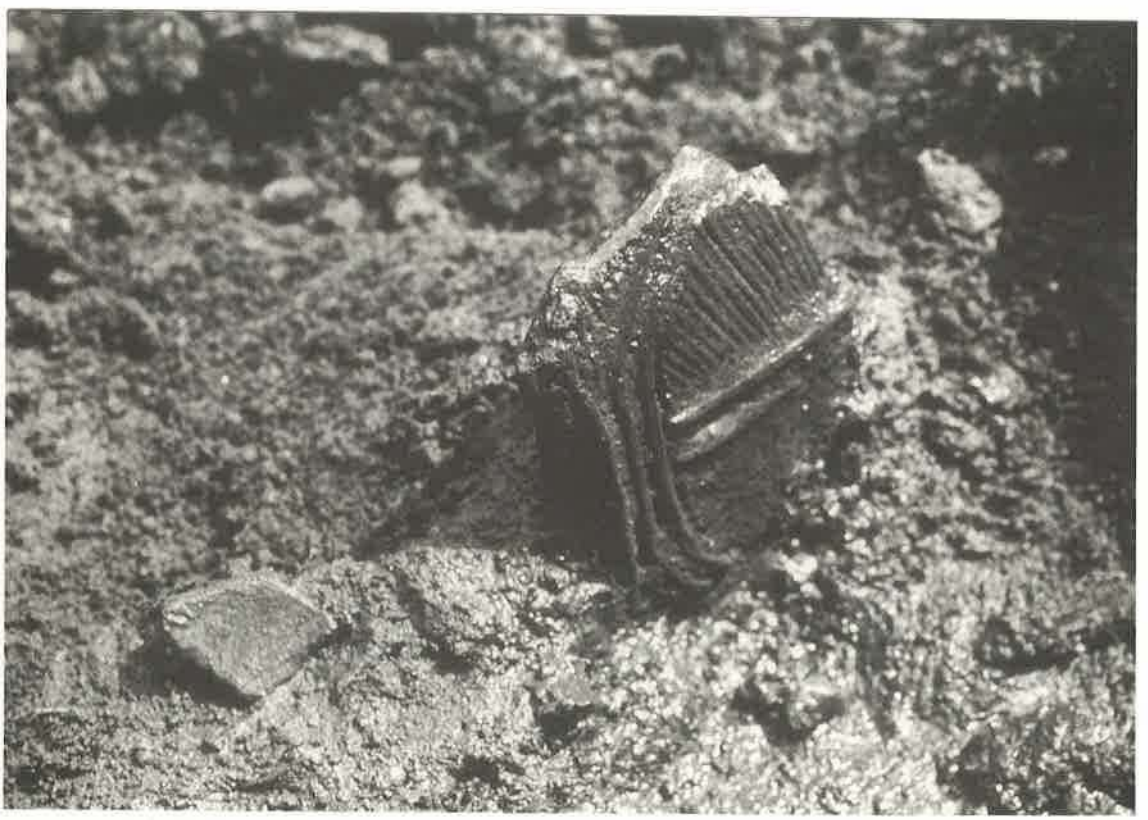
作 業 風 景

調 査 区 全 景

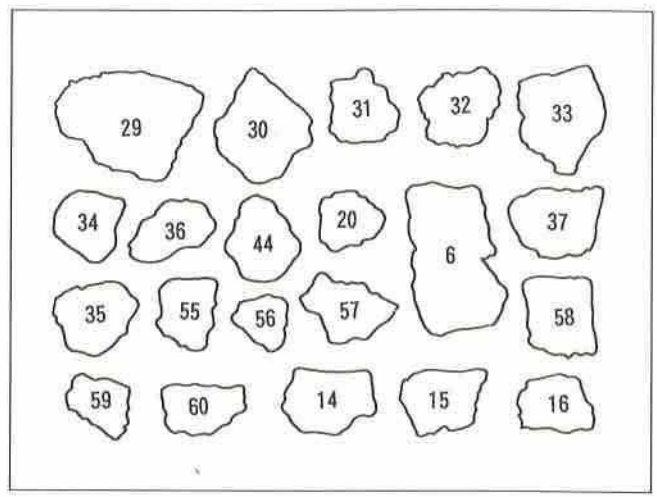
説 明 会 風 景

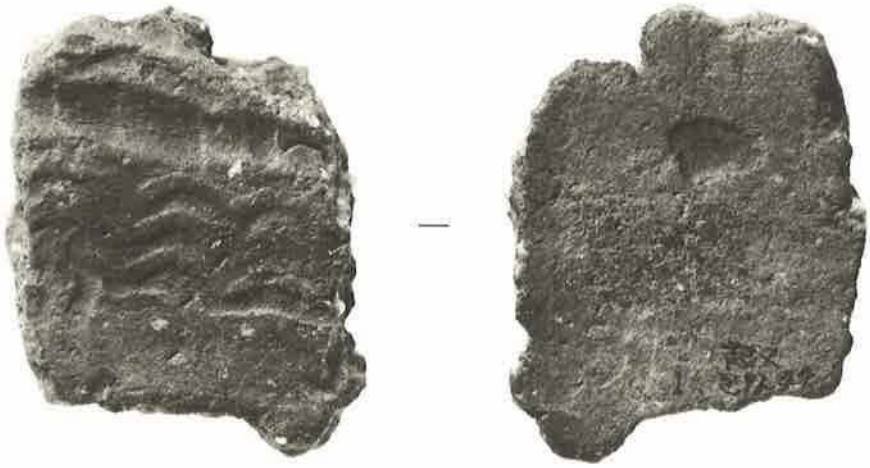


遺構検出状況

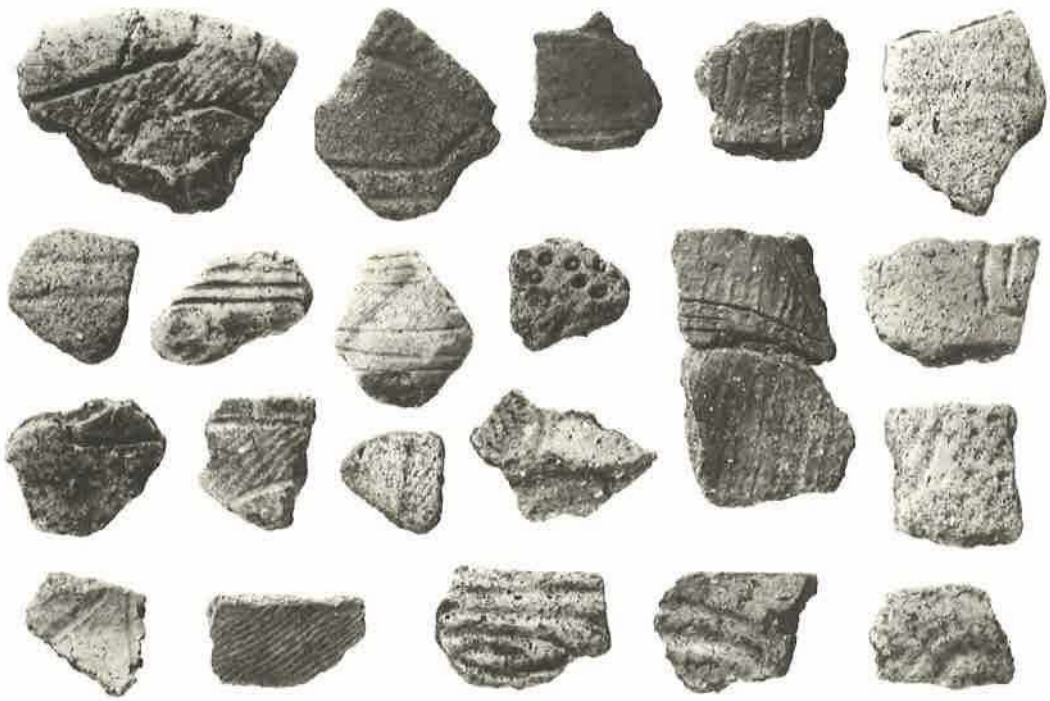


遺物出土状況

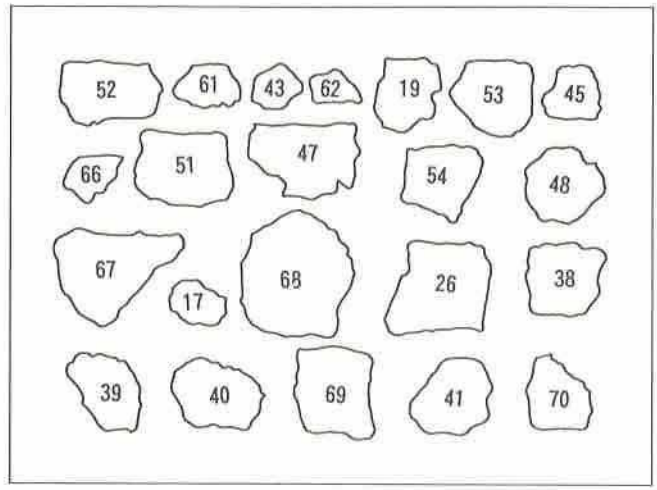

29
30
31
32
33
34
36
44
20
6
37
35
55
56
57
58
59
60
14
15
16

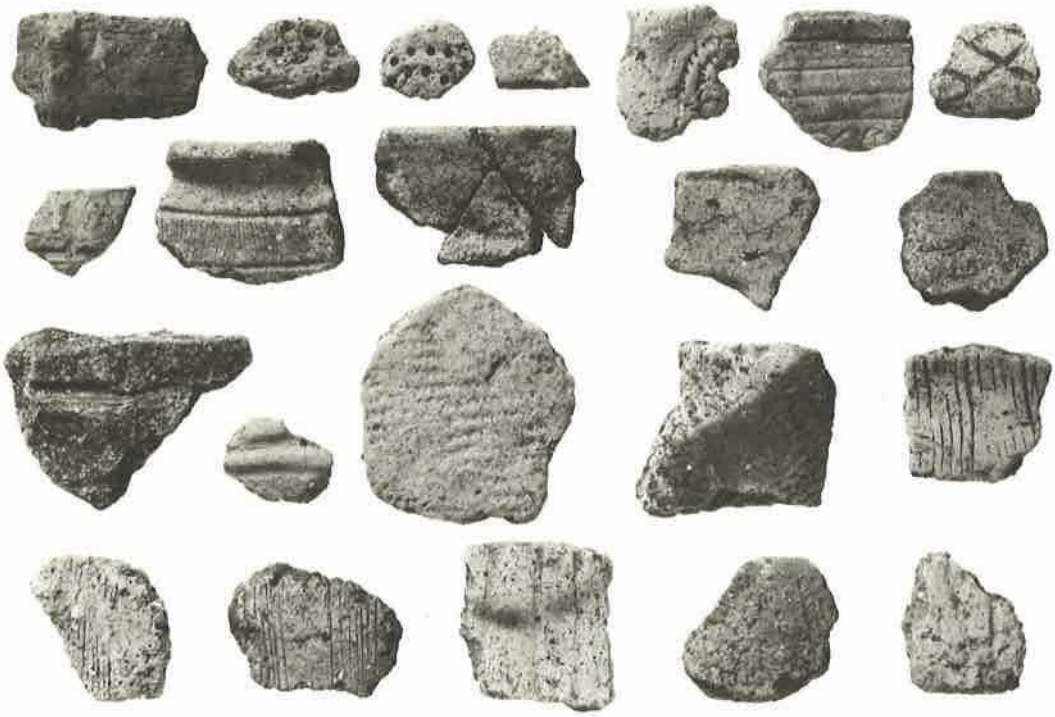


出土遺物（早期押型文土器）

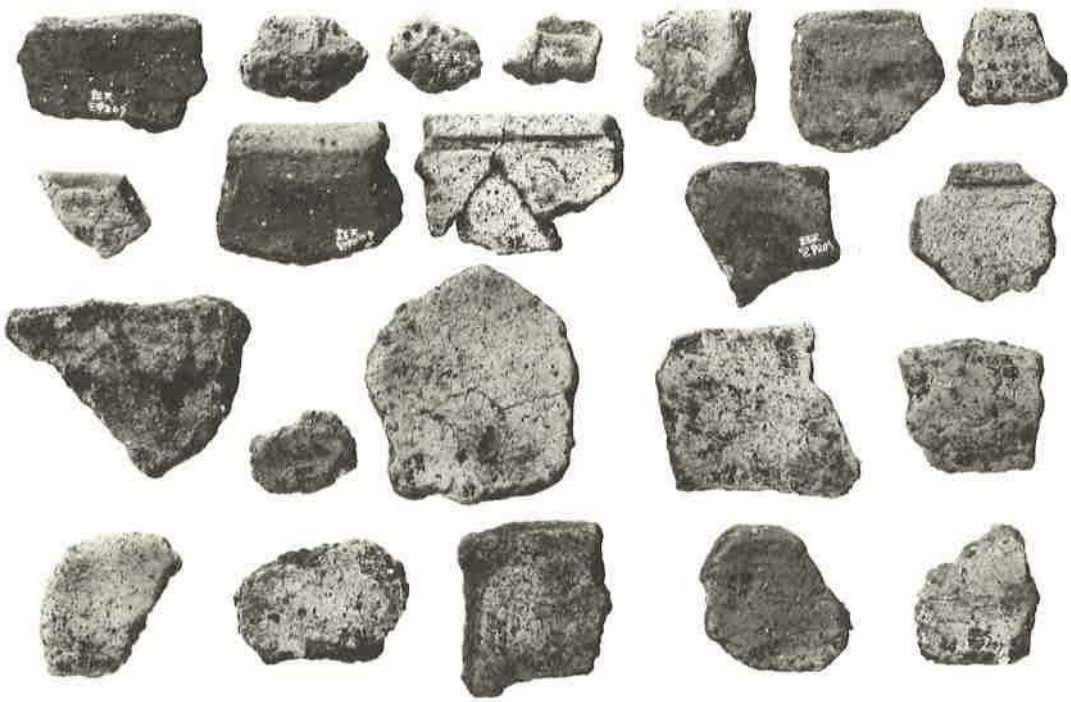


出土遺物（縄文式土器）

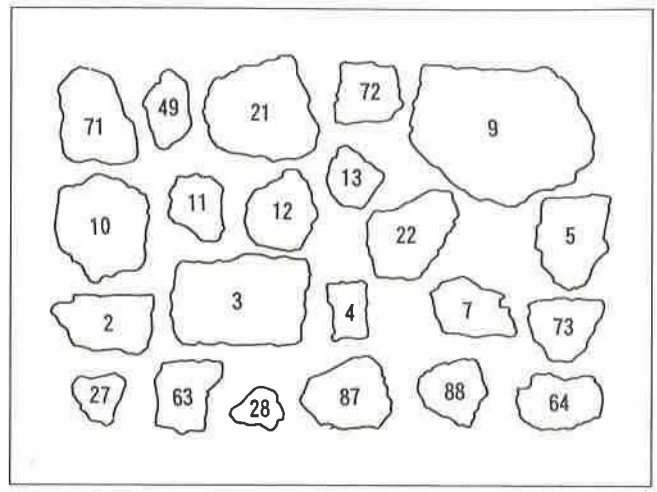

52
61
43
62
19
53
45
66
51
47
54
48
67
17
68
26
38
39
40
69
41
70

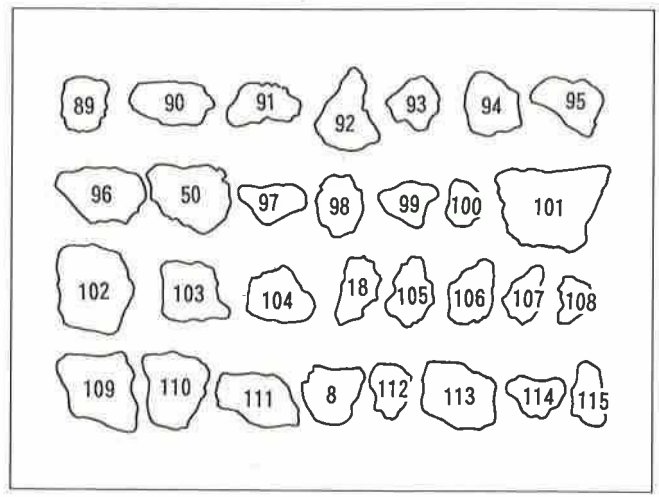


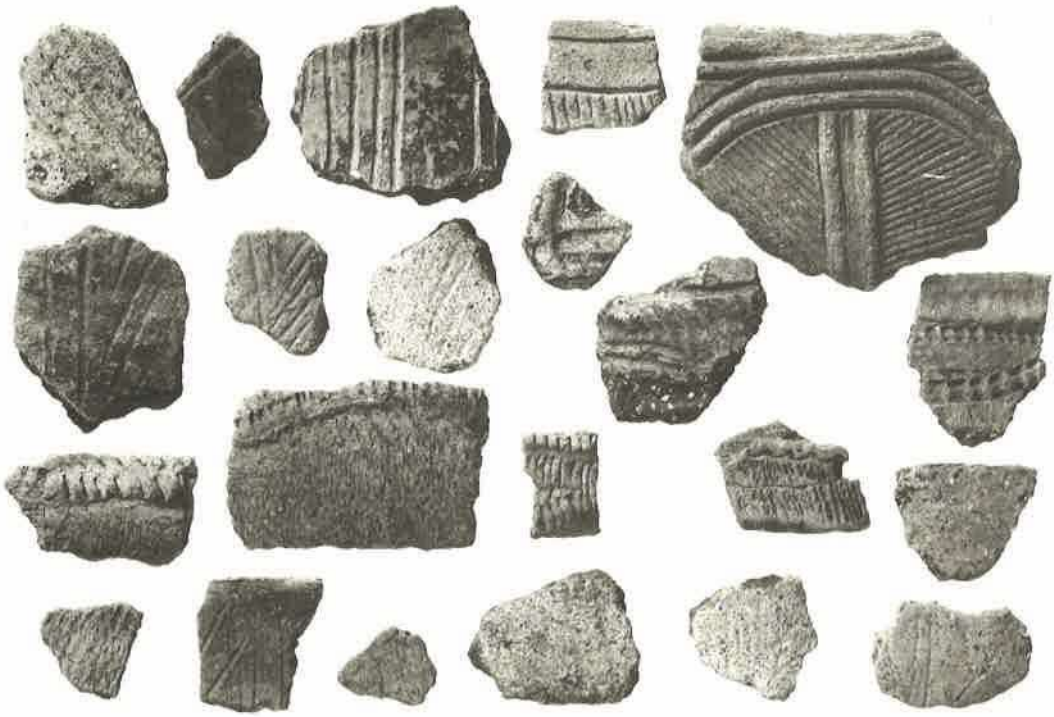
出土遺物（縄文式土器）



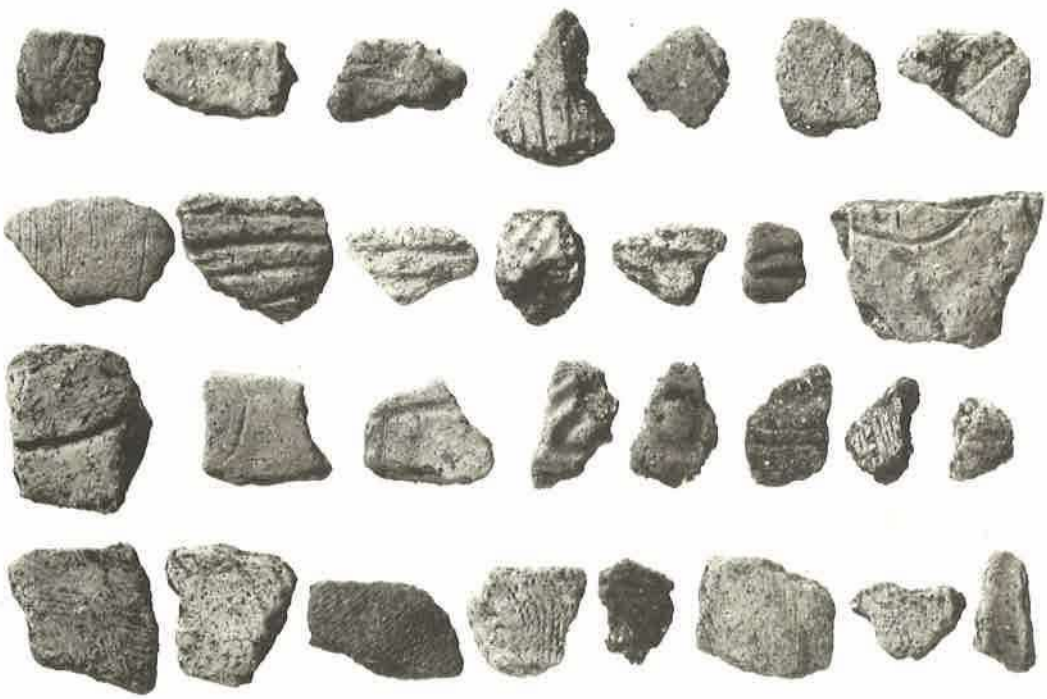
出土遺物（同上裏面）


71
49
21
72
9
13
10
11
12
22
5
2
3
4
7
73
27
63
28
87
88
64

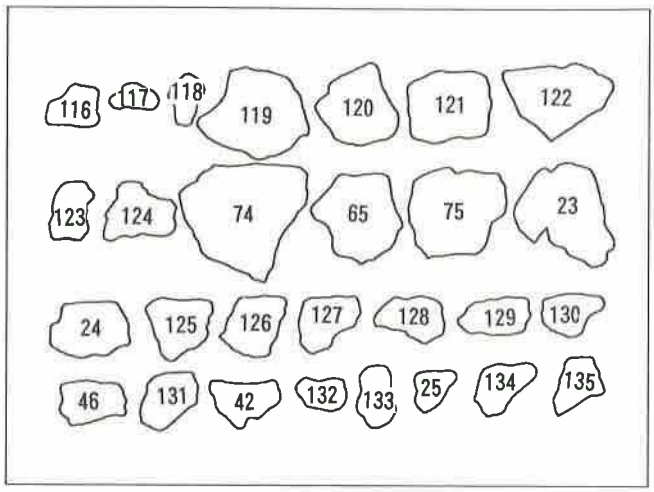

89
90
91
92
93
94
95
96
50
97
98
99
100
101
102
103
104
18
105
106
107
108
109
110
111
8
112
113
114
115

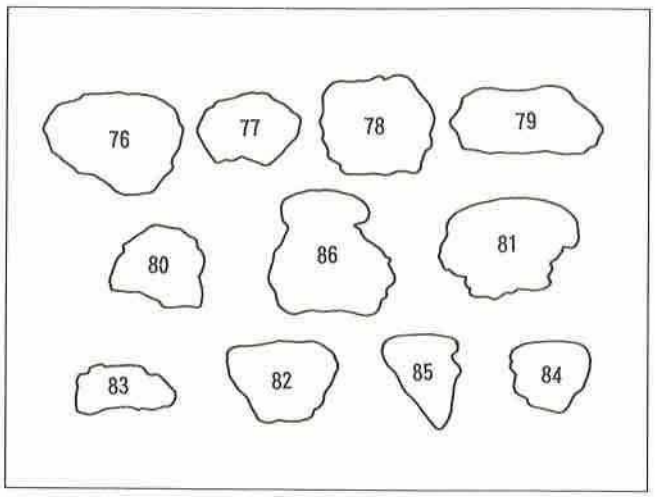


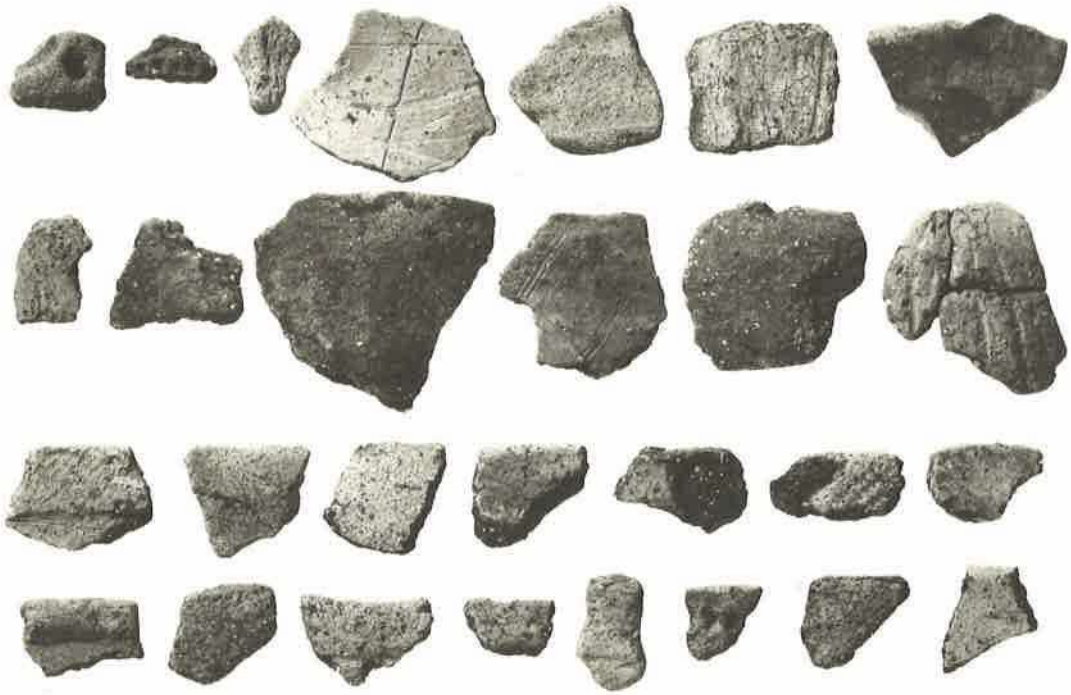
出土遺物（縄文式土器）



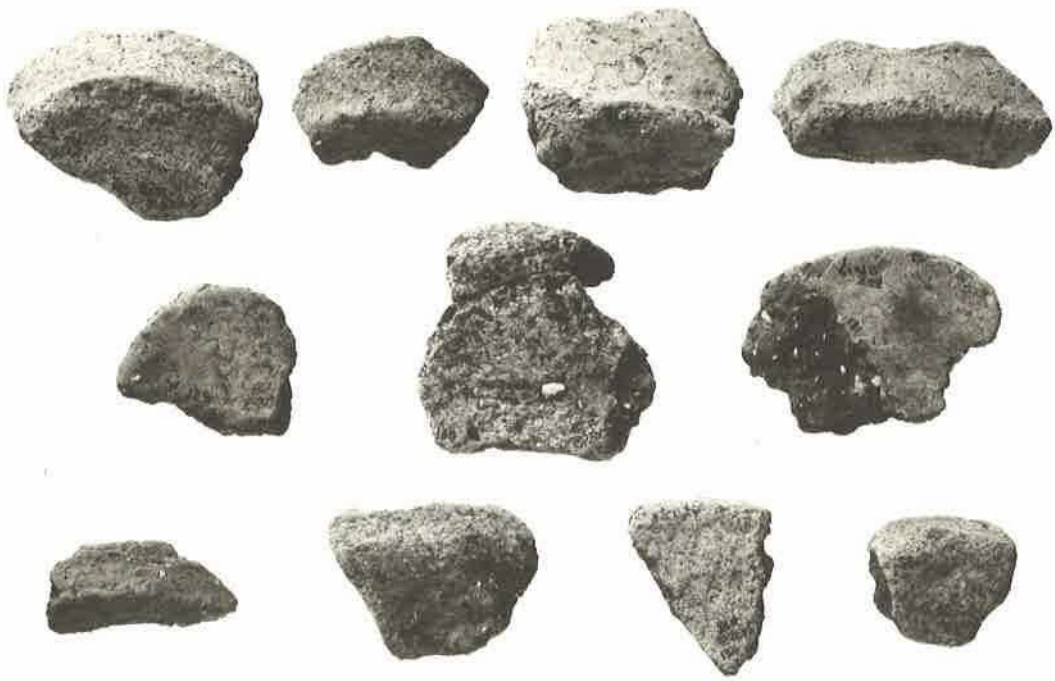
出土遺物（縄文式土器）


116
117
118
119
120
121
122
123
124
74
65
75
23
24
125
126
127
128
129
130
46
131
42
132
133
25
134
135


76
77
78
79
80
86
81
83
82
85
84



出土遺物（縄文式土器）



出土遺物（縄文式土器底部）

出土遺物（石器）

出土遺物（石器）

正誤表

文中に間違いがありましたので以下のとおり訂正をお願いいたします。

5ページ上から21行目

南北町→南北朝

33ページ上から11行目

すえふく　→すえきち

18．末福遺跡

伊吹町文化財調査報告書第６集
起し又遺跡発掘調査

1993年 3月

編集・発行　滋賀県坂田郡伊吹町教育委員会
印　　刷　垂井日之出印刷